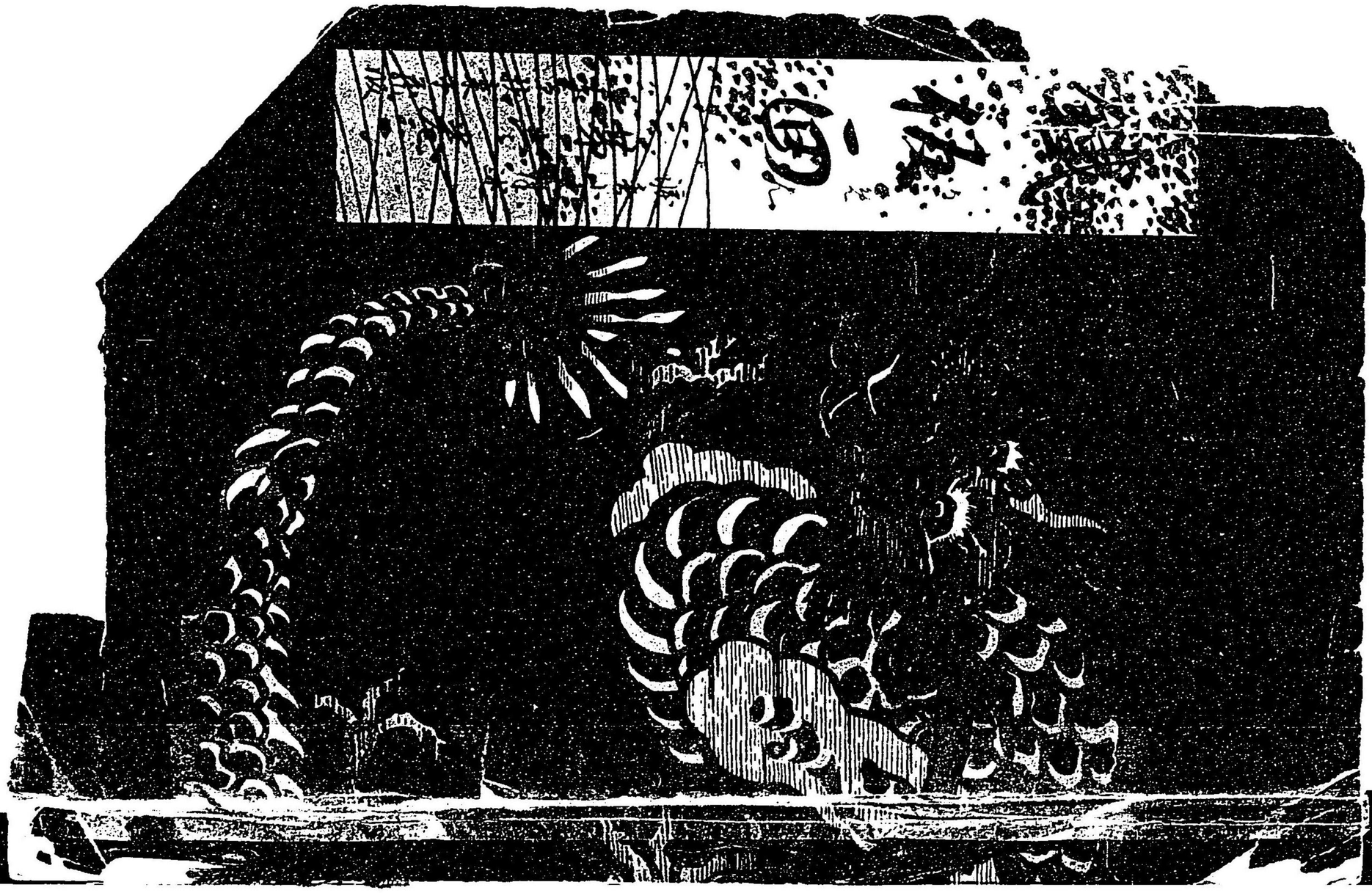
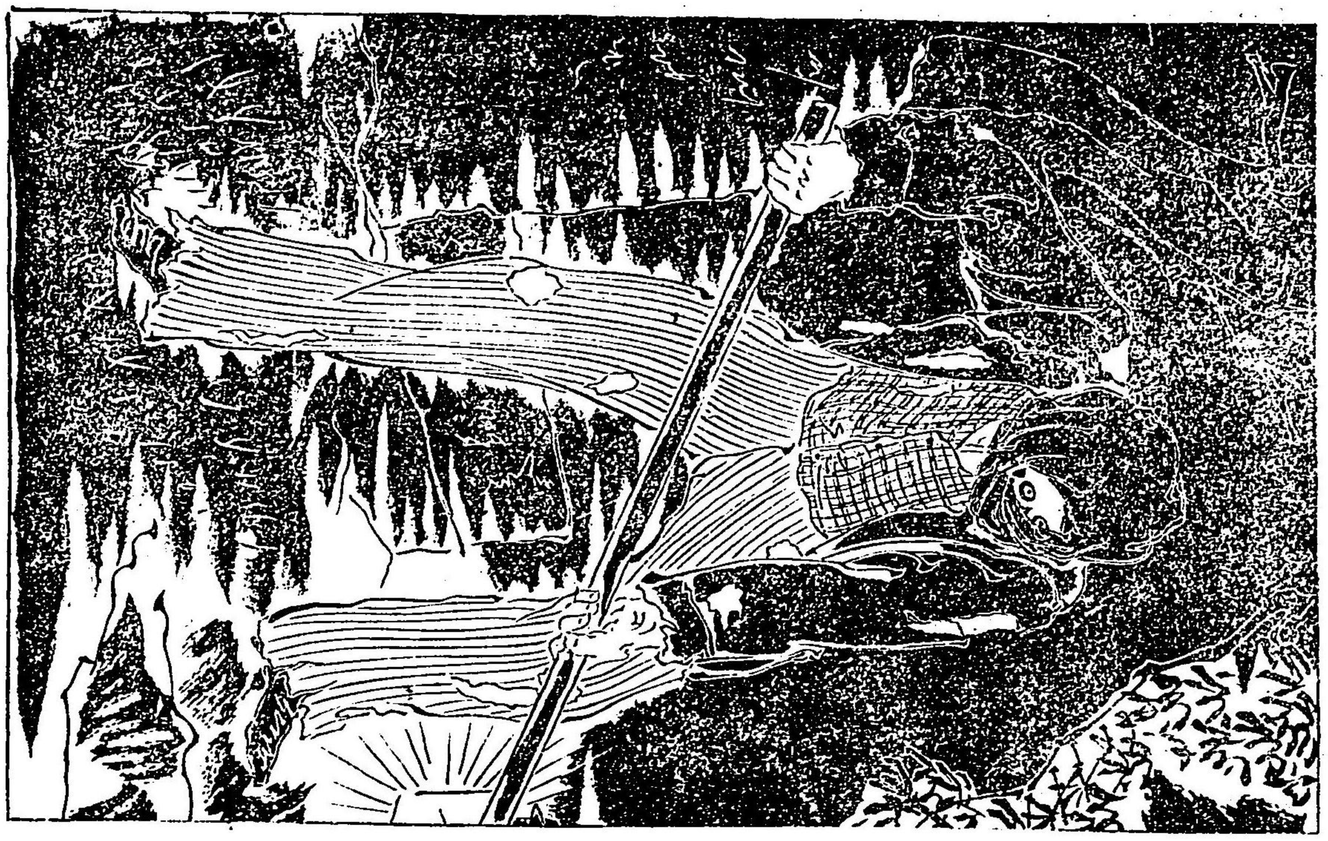
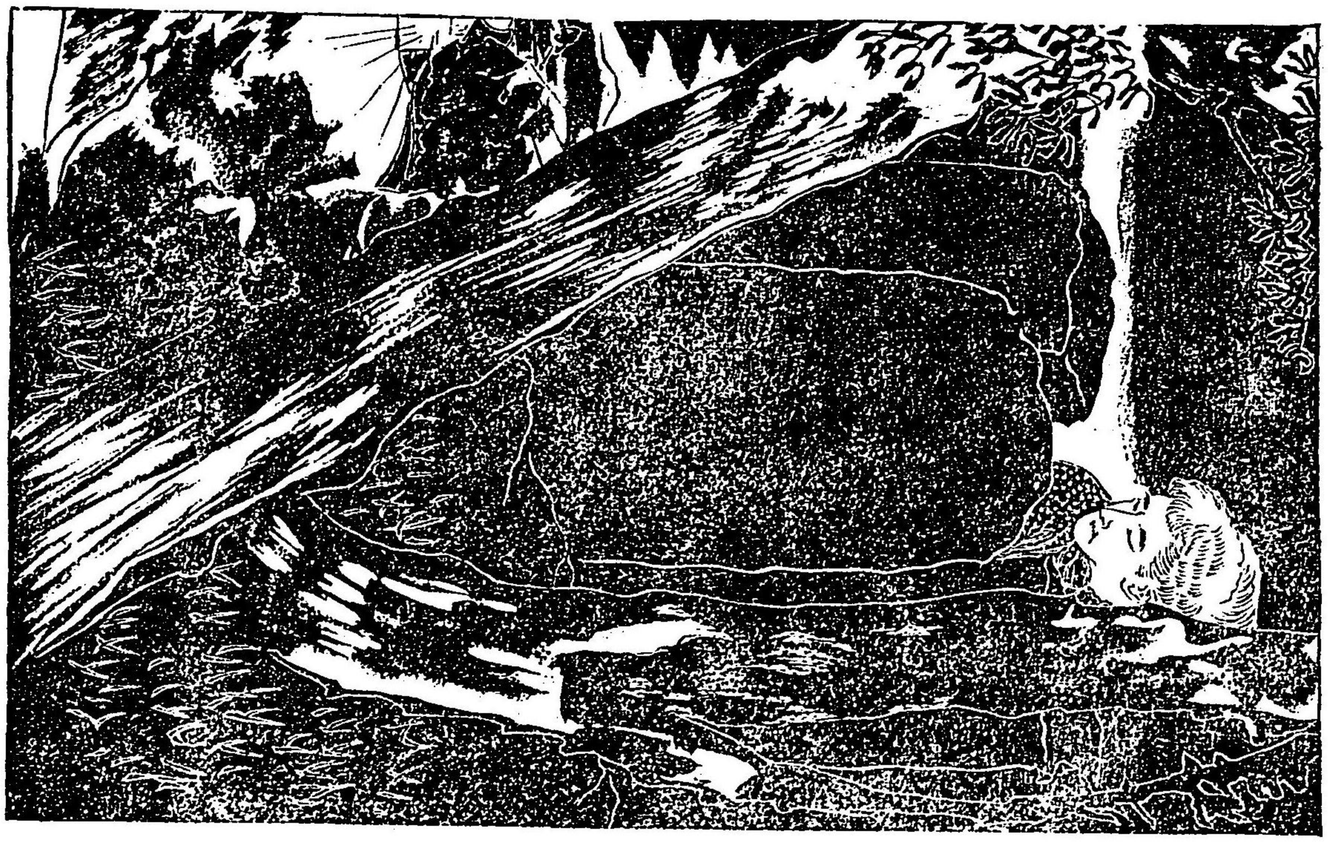


序

中古我が邦にて即智明察を以て能く訟獄を理め美名を末代に傳へたる大岡越前守忠相氏が數種の裁判に於て最も世人に怪訝を懷かせ獄門にして其殘酷なる處分は例の得意の方便にて罪の疑はしきを其反証のあらざる爲め一時の策畧に出でしよりとぞ是は泰西の歴史小説にて事實をろのまゝ鐵仮面と題したる最も不可思議なる談柄なり當時之が研究に就ては學士社會の大問題となりし佛國革命前の事にして一個の囚人が鐵の仮面に面部を覆はれて三十年間の永き年月聞も身の毛の彌立ある彼のバスチールの牢獄に繫がれしといふろの犯罪人の來歴を

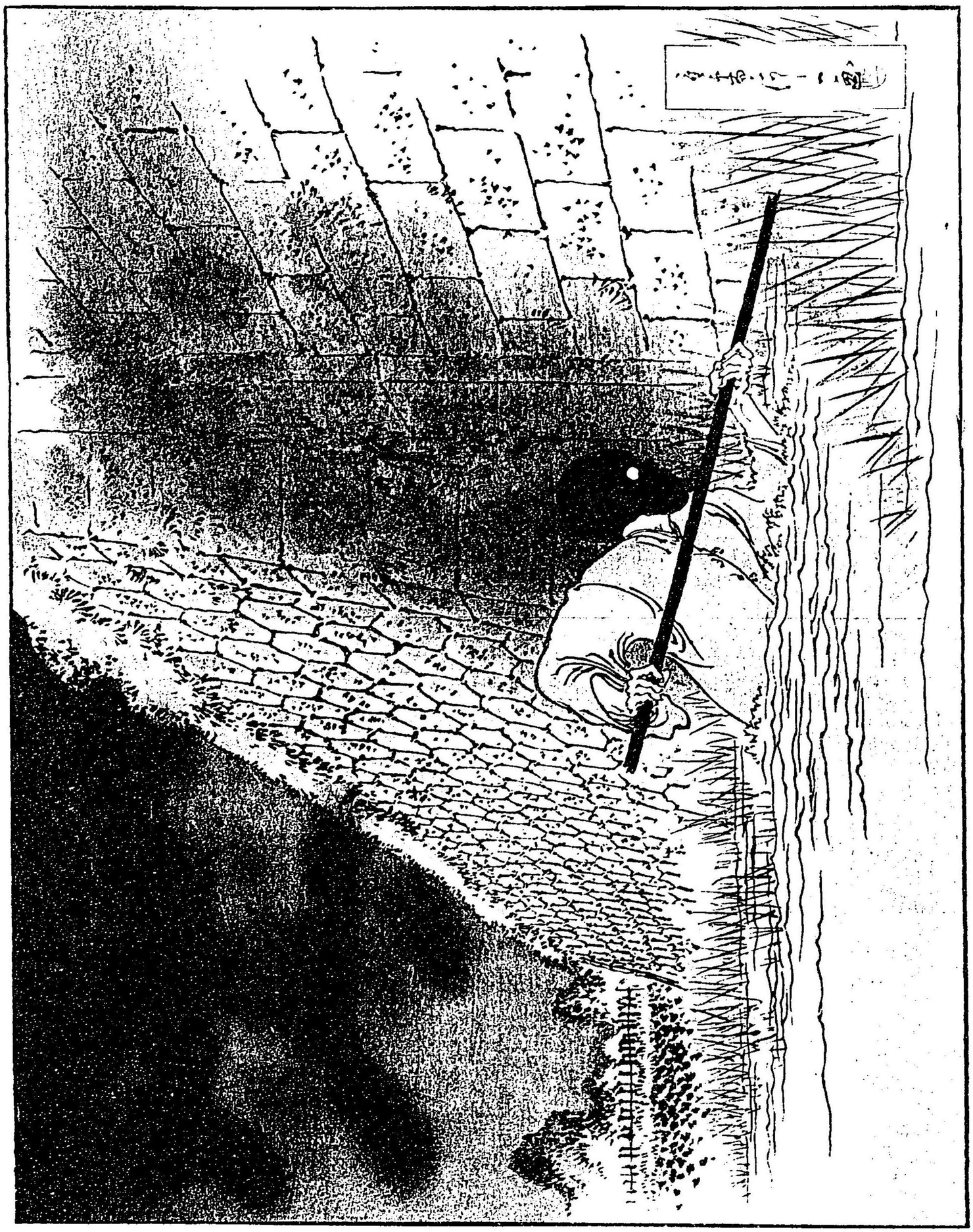




有名なるボアスゴペ氏がものせしを黑岩涙香氏が翻案して實地目擊する如く國事に尽す志士仁人の流離艱難或は泣き或は怒り或は憂ひ或は悲み殆んど讀者を狂乱せしめんとするは氏が健腕の然らしむる業かれは決して稱するに及ばず只だ此事實に至りては最も奇獄の奇聞にして章毎に怪訝を生じ回毎に疑團を增す空前絶後の傑作なりと先づ讀者に一驚を喫せしめて而して後其興味を味はせんとするものは

明治二十六年五月

竹葉舍晋升



439
901

鐵假面

序說（一）

淚香小史譯

三十年の永き月日を鎖の假面に顏を隱して送りしと云はゞ人誰か獻と思はん去れども實際に斯る人ありたり、夫も唯だ三十年を暮せしに非ずして世界中の最も恐る可き大牢屋佛國のバスチルの中に捕はれて暮せしなり假面の僞に病に罹り假面の僞に牢死したれば人皆な其の誰なりしやを知らず、茲に其の僞りならぬ證據として當時の牢番ヂャンカと云へる人の手帳を拔書して記さんに千七百三年（今より百八十九年前）十二月十九日（月曜日）の條に

「常に黑き假面を被り居たる誰とも知れぬ彼の囚人は、昨日の日曜に例

の如く說教を聞きしが其後にて直ぐ病氣となり左まで危篤とも見えざりしに夜の十時頃に及びて假面の儘に死したり

長老ギロット氏は其病の床に臨み種々此人を慰めたれど此人最早や死際なりし故一身の事を長老に打明しや否は知らず云々、此四人は典獄サン、マール氏がマーケリットより連來たりし者なり云々

又其後の條に

「彼の誰とも知れぬ囚人は廿日の午後四時にサン、ボール寺の共同墓地に葬られたり、寺の過去帳には少佐ロサル氏と醫師レイル氏が四人の名を記したり、其名何と云へるやは知られど後にて聞けばマーシュルと有りし由なり埋葬費は四十リブルなりし」

「一百年近き今と雖ども尚ほ假面の評判猶ほ傳は

り世界の人の怪むも無理ならず、小說にも無き斯る不思議の囚人が全くパスチルに在りしと右の證據にて明かれば、扨此四人は何の時に此大牢屋に入られしや是尋ぬるに同じ人の手帳なる是より五年前のペリスに

「此度マーケリットより轉任して初めて此監獄の長と爲りしサン、マール氏は千六百九十八年（今より百九十四年前）十一月十八日に來着したるが臥床に

載せし僅一人の不思議なる囚人を連れ來たれり、此囚人は猶ほ遙かに以前に氏がピサロルに在勤せし時より引き連れ居る由にて名前も分からず顔は鐵の假面に包まれたれば人相も見るに由なし余は此囚人は直に獄内なるパシニル塔の最上等室を掃除して待居たれば彼れの着すると共に彼を其室に入たるに夜の九時に及び彼はパトーデエ塔の南室に移されたり此室は兼て彼を入れる爲め特別に上等の雜作を施し置たる者なり此囚人には初より軍曹(後の少佐)ロサルウ氏が附添居りて何事も世話を爲せり但し其費用は總て典獄サン、マール氏の受持ちたり云々

是にて見れば此稀代なる囚人がパスチルに在しは滿五年程なれども中間よりマーケリッシに移され同所より中央大監獄に入られしなど總て其補はれ居たる年數は三十年なりと云ふ其間鐵の假面を脱ぎりし

故此人の生涯は生前も死後も總て大不思議の中に在り何人も知る能はずと雖

去れども其身分を詮索せざるが爲に知れざるには非ず此人の死して よりは詮鑿と云ふ詮鑿は殆ど任意したり何分にも餘りに不思議の事なれば必ず深き子細あらんとて其後(千七百八十九年七月十四日)に右の大監獄の打毀されしとき佛國の歴史家小説家文學士等は此大監獄の日記には必ず鐵假面の實傳ありて其捕はれし事情より其人の誰なるやは勿論其罪の本第まで記しあるに相違なしと思ひ選早く馳寄りて其日記帳を取出し委員を選びて充分に詮索を加へたるに悲しや鐵假面が入牢せし當日の紙面と其の死したる日の紙面は綺麗に破り取りて痕も留めず是は鐵假面が一通の囚人に非ずして當時の政府の爲に大秘密たりし事は充分に明かなり去れど詮索の道は全たく盡きたり當時の政府は千歳

の後に至るも、此秘密を見破られては成らじと思ひ其用心に漸は日記帳を剪取りし者と思はる

涙香曰く此序說は鐵假面が如何ほどの不思議なるやを解さぜる我國の人々に對しては略す譯に行き難し猶は一回を塞ぎ夫より本文に取掛らん

序說（二）

何の爲めの鐵假面、人は誰れ、罪はなに、樣々の詮索に從ひて樣々の推量も出たれど孰れも詮索の進むに進れて間違あると分りたり茲に夫等の推量の重なる者を記さんに

最も世間より取唯されしは有名なる文學者ポルテールの說なる可し此人は最微妙なる考へにて不思議の趣向を編出し鐵假面は前王路易十三世

の后なるアンヌ女の生みし私生の子（伯爵ペルマンドア）か左なくば路易十四世と穴リエール嬢の間に生れたる私生の子ならんと云ひたれど此說は唯だ趣向の妙なるのみにて充分なる歷史上の證據無し實際彼の伯爵ペルマンドアは鐵假面より十年前にバルセーユにて死せし人なり

次には英國チヤールス二世の落し胤にてマンモース侯爵と稱されし人ならんと云へど此侯爵千六百八十五年七月十六日に斬首せられし故に百三年の十一月十九日に死したる鐵假面には非ず

又ヒウ歩ード侯爵あるは其當人ならんと云ふ人も多けれど此侯爵は千六百六十九年六月廿六日カンヂヤの戰場にて討死したり即ち鐵假面の捕はれぬ前に此世を去りしなり

或人は路易十四世の宰相にして大藏太臣を兼ね非常の權威を振ひたるフオーケーならんと云へどフオーケーは唯鐵假面と同じ頃に同じ

ロルの塞に幽囚せられ居たる丈にて巴里の大監獄へは移されずせチロルの牢中にて千六百八十年三月廿三日に死去したり

有名なる歴史家シスモンダイ氏の説にては前に記せしアンヌ女(路易十四世の母)が雙胎を生み其一人を王位に登せて路易十四とせしより王位の爭ひ起らんを恐れ殘る一人に假面を被せ生涯を獄中に送らせしと云ふ元々雙胎にして路易十四世と顔形同じ事も之假面を被せずには置れぬ事となりたりと(此説は仕組の面白きと第一等なれば有名なる作者デルニュ及びアノールド等は之を芝居に作り千八百三十一年オデオン劇場にて演ぜし事あり又小説家アレキサンドル、デユマも此説を燒直して「子爵ブラゼロン」と題する小説を作りたり去れど此説は種々の傳記を作りて名を揭げたるスラビーと稱する人が自分の想像を土臺として作り上たるが根據にて外に証據の無きものなり

此外に猶一説あり個は最も事實の詮索に名を得たる諸大家の同意せる所にして殊にメリヤ、トーピン氏の如きは其考証を集めて一書を著したり其説に由れば佛國路易十四世がサボーイの君主と平和條約を結びカサル地方を我領分として受取らんと協議せしとき其席に立會しマンチユア侯爵の從者伊國人マッチョッリなりと云ふ

成る程從者マッチョッリは恐る可き陰謀家にて右の條約に際し路易王より賄賂を受けながら却て路易王の秘密を敵に賣り二重の謀反を圖りたれば千六百七十九年に鐵假面と同じくピチロルの獄に捕へられ其後も鐵假面と同じくマルゲットに移され鐵假面と同じくサン、マール氏に保監されたり

此説は尤も事實に基きたる者なれば何人も異議を唱ふる者なく一時は殆ど此説に定まり居たれど租税局の吏員を勤めしジャンクと云へる人

之を疑ひ、二百年前の種々の記錄より調査を初め當時の大臣ルーボアと鐵假面の保監者サン、マールとの間に往復せし密秘書類其他の密書公文等を彼れ是れ點査して漸く此説の過ちを見出せりマッチコリは全く鐵假面より數年間マルゲットの牢屋にて死したるに相違なし

是にて今までの説は悉く間違ひと分りたるも夫に就けて益々分らずなりたるは鐵假面の本人なり、誰ぞ、何の罪ぞ、何の爲めの鐵假面ぞ

是等の詮索に連れて鐵假面の當時の事情は次第に分りたれど鐵假面のみは分らず、其保監者サンマールとは古今未曾の嚴酷なる牢番にして唯だ己の出世を是願ひ上役より言附りし事ならば命に代ても之を守り下へ向つては一點の慈悲も無く終に此憐れむ可き囚人に三十年間鐵の假面を被せ置き、何人にも其顏を見せしめずして、國家の秘密を守り果せる事も分りたり唯分らぬは鐵假面のみ

余は兼てより此不幸なる囚人の身の上を探らんとの決心を起し通傳を求めて政府の文書を調べたるに凡そ政府向の事扨は此時代(路易十四世の頃)ほど明かに記錄の備れるは無し、去れど又民間の事扨は此時代ほど分らぬは無し、然るも猶政府向の書類に此事件を記さぬは當時の國王或は大臣が大事の秘密として曾記官にだも知さざりし爲に相違なし余は斯と見て方角を一轉し更に尤も分り難き民間の私書を調べ初めたるに苦心幾年に渉り、今は明かに鐵假面の誰たると其罪の何たるを探り得たり、實に是れ奇々怪々の事實なれば余は當時の歷史と照し合せ成る可く廣く世人に知しめん爲め小説体よ記述して公けにする事としたり

氣永く本篇を讀み終りて初めて鐵假面の誰なるやは分るならん、鐵假面の本名は此書の終りのページに在り　　巴里府にて　ボアスゴベ記

譯者曰く斯の如き正史實傳を日本風に譯述するは本意なき業なれど

も今までの例なれば皆日本の名に事代へて本名は毎回の初めに記さん猶又三十年に渉る長物語なれば無用の所ろは大抵省略する積りなれど猶ほ多少の管々しき所も有るは歴史に據れる爲なりと恕せられよ。

正史實歴

鐵假面

第一回　涙香小史譯

伯爾有藻守雄（原名、姓アルモイス、名モーリス）妙陀孃（原名パンダ）

佛國の王路易第十四世と明えしは拿烈翁にも並ぶ程威名赫々たる君王にして外を虐げ内を窘め思ふが儘の振舞最多かりしかば誰一人此王を恐れぬは無く中には痛く怨みを結びて或は隣國の刀を併せ此王を捻にせんと圖り或は不平ある皇族に結びて王位より退落さんと計むなど目に見えぬ陰謀絶間無き程なりしも唯幸ひに時の警視總監婆武と稱する人強情不屈の氣質にて數多の秘密探偵を使ひ片ッ端より容赦も無く捕へ附たれば多くは物に成らずして終りたるが此頃斯る不平の有志が事を擧るの根城と

せしは多く隣國伯拉滑の都プルセル府にして茲よりは巴里へ攻入る事も易く巴里より逃來るにも亦左程に難からず萬事の掛引に都合好き爲なりしとぞ

時は今より二百二十年の昔、千六百七十二年二月九日、雪の降る夕方なりしプルセルの町の入口(巴里の方より)に在る居酒屋の庭に腰掛け、寒さ凌ぎの升酒に湯氣の出る煮込の出來立を賞しながら雜話せる許多の客あり是れに影日向なく給仕して急しげに腰掛臺の間を縫歩く此家の主人が時々樣子ありげに渺暗き隅の方に目を注ぐは何故にやと見るに、居酒屋よは似合はしからぬ武士風の二人の客、戰國の時代とて腰に人切庖丁を横へ何か密々と打語らへり其一人は年二十七八ならんか脊は高き方なれど優形にて顏は風に洒れ雨に荒みて色艶晰やかならねども眉濃く眼澄へて鼻筋通り、締りたる口許の黑き八字髭に包まれしは所謂る威ありて猛からぬ風采あり

之に伴ふ一人は是よりも猶年下にて二十歳に足り足らずの美少年、色は窓に積む雪よりも白くして却て靑味を帶び、房やかなる髮の毛は帽子にも包み切れず猶ほ前額の邊に食み出して畫にも描せぬ生際を形作り、眼には無限の愛嬌あれども何所と無く悲しげなる面持なるは持て生れし天性にや夫とも氣に掛る事のみにて心の鬱ぐ爲にも有るか、熟れにしても此悲げなる面持は彼の美くしき容貌を紊さずして却て可憐の趣を添る者なり主人が時々に倫み見るも此美くしさを怪みての事なる可し、若し此主人にして彼れの優しき手先と靴の細きに心附かば彼れ美少年に非ずして其實男裝の美人たるを見破るに難からじ、美人は時々悲ゆなる眼を擧ゆ何やらん氣遣はしゆに男の顏を眺むれど男は外に心に掛かる事あるにや、美人の愛には氣も移らず、戶口の方をのみ眺めて「ア、未だ來ぬが」と呟くは何かの便りを待つ者と察せらる　美「守雄さん何を其樣にお待成さるのです」守雄と呼

ばれし連の武士は少し自烈たる樣子にて「何をとて郵便馬車を待て居るのか、今度の馬車で阿蘭新聞が着く筈だから　美「アヽ爾でした、阿蘭新聞に」と言掛て合けば守雄は情なき口調にて「妬陀　美「ハイ　守「和女は此頃何で其樣に茫乎して物事を能く忘れるのだ」と叱り掛るに陀娥は恨しかに「今まででとても貴方の爲に父母を忘れ家を忘れ、此樣な姿をして」と涙を浮めて男裝の我姿を見廻せば守雄も斷腸の思ひよや早くも聲を柔げて「アヽ是も時節だ仕方が無いと許して呉れ、今に見ろ阿蘭の新聞が着て夫に味方の合圖の文字が乘つて居れば」と思はず調子を高くして心附き又細語の聲に沈みて「ナニ斯して待て居る中に已の命が定るのだ生るか死るか　妬「私しの命もです、此險呑な大仕事が破れて仕舞ひ貴方が殺される事になれば私しも一緒です」守雄は可愛氣に妬陀の手を取り「實に爾だ　妬「では最う何時までも止る氣は無いのですか、今の内に思止まって二人で故郷へ歸て行ば何不足

なく伯爵よ伯爵夫人よと待つかれて　守「又其樣な愚痴を云ふ　妬「だッて僅の同勢で此樣な事をするかと思へば敗れるに極て居ますもの本統に私しは――　守「ナアニ同勢は僅でも吾々が愈々旗を上たと聞けば隣國は皆兵を起すと云ふ約束に成て居る今の所は僅でも後から續く者は充分だ今更ら何うして止れる者か敵と目指す路易王への復讐だもの、伯爵と云ふ素性の正しき一武士を、許嫁の女から手紙を受たと云ふ廉で兵部から追退て散々の恥辱を與へ其上、已は最う今までの艱難辛苦を考へると路易王の喉の肉を食取ても腹は愈えぬ王のみか其下に使はれて居る窪武までが、已の行く先々まで探偵を指向て、ヱヽ今に見ろ阿蘭新聞の第三項に羅馬と云ふ二文字が見えれば愈々佛國へ乘込めと云ふ大將からの差圖だから、同志十五人を引連て和女と共に、此地を立ち路易王と奸臣窪武に、此伯爵有漢守雄の怨みが何の樣な者か思ひ知せて呉るワエ今夜が實に獸羅巴全洲の景勢

を一變する大端緒だ」と兩の手を握りめて武者振に身を震せつゝ再び戸口を眺むるに今度ころは無益に非ず、郵便馬車は戸口にて荷を卸し其中より一枚の新聞紙を此家の主人が取出して此方へと持來る所なれば守雄は多年の本望成就の時來れりと眼に銳き光を浮ぶるに此時外より入來る大の男、身に四尺餘も有んかと思はるゝ大刀を横へし儘、無遠慮に主人を引留め「アヽ阿蘭新聞かドレ〳〵而白い事でも書て有う」と云ひ主人が拒む暇も無き間に早や新聞を引奪り「是だ〳〵、緩くりと讀で樂まうか」と云ひ傍者無人に其の邊の蓙に腰を卸し、四邊搖はず絨服の雲を拂ひて無言の儘に讀み初めたり

第二回

待ちに待ちたる大事の新聞紙を横取する不届者、彼れ何奴ぞと守雄は怒る

目を見開きて先づ其者の樣子を見るに肩の幅三尺も有んかと思はるゝ嚴丈の荒武者にして色黑く唇厚く頬より顎に至るまで一面の虎髯を手入もせずに生したるは一癖も二癖も有る面魂、常物とは思はれず猶ほ其友達とも云ふ可きか一目見ても小才の利相なる容の低き一紳士彼れと並びて腰を掛たり、是だけ見し所にては唯だ強相な相手と云ふのみにて何者なるか分らねば守雄は故と知らぬ顔にて先づ主人を呼び「コレ亭主先刻頼で置た阿蘭新聞は何うした、早く茲へ持て來ぬかと促すに亭主は當惑氣に頭を搔き守雄と彼の荒武者の顔を七分三分に眺めながら「ヘイ、其新聞紙は唯今貴方樣に上る積りで、ヘイ茲まで持て來ましたが、ツイー　宇、茲まで持て來てツイ何ちした　宇、ヘイ此旦那が、ヨ、ヨ横取を成されました」答へながら武士同士の事なれば必定咱嘩の元と見て傍杖に與らじと思ふ如く徐〳〵脊然へ引下れり、荒武者は亭主の言葉充分耳に入りし筈なるに振向もせず

敖然として新聞を讀續くにも守雄は「己れ」と目に角を立てれど猶ほ堪忍の緒を〆て武士に向ひ「卒爾ながら此者の申す通り全く貴方が新聞を取ましたか」と言葉低く問掛るに彼れノッソリと此方に向き最横柄に守雄の顏を打見遣り二度三度其肩を上下し何か咎ふるかと思ひの外何事をも言ずして又も新聞紙に向ひたり、守雄は怒りに顏の色を青くして「オヽ是は實に怪しからん貴方は作方を知りませんか武士の作法を此通り面掛るに一言の返事をせぬとは」彼れ面憎きほど愚弄する調子にて「氣に向ば返事もするが己は氣に向ねば默つて居るワヽヱヽ小夏蠅い　守氣に向くも向ぬも無い貴方は其新聞を横取したでは有ませんか　蕉「其樣な事は問はずとも目で見れば分つて居る、横取したからこそ此通り讀で居るのだアヽ今日は餘ほど面白い事が書て有る文字を讀むのは些と不得手な方だけれど仕舞まで殘らず讀ねば氣が濟まぬ」と飽くまで無禮に構ゆる故最う堪忍も是までなり

りと刀の柄に手を掛てアハヤ飛掛らんと足を踏堅むるに背後より妙陀鐵手を掛て泣ぬ計りに諫むる聲にて「貴方――」此聲に守雄は忽ち我に歸り我身の場合を思ひ見れば斯る小事に腹立て大事を過る可きに非ず、今茲にて喧嘩せは此國の警察に捕はれて如何なる目に逢んも知れず、殊には佛國の警視總監彼の憎む可き寒武より到る所へ探偵を配り置きて我身を探させ居る折柄なるに如何で期ろ痴漢を相手にして身の危きを招く可けんや、忍れるだけは忍ばんとて漸くに又心を鎮め更に言葉を丁寧にして「イヤ貴方は未だ此新聞を私しが故々郵便で取寄せた事を御存が有ますまい實は最う一時間程前から此新聞の見度い爲め茲に待受て居たのですから　蕉「其樣な事を己が知るヤエ、待受て居た新聞でも待受て居ぬ新聞でも、面白ければ取て讀むのが己の癖だ」守雄は血の出る程に唇を嚙みメて怒る眼を無禮者の顏に注ぎしも又我慢して「イヤ爾でも有ませうが少しの間、一寸とお貸

下されば直にお返し申します、コレ、モシ、お願ひです」と人に向つて合せしてとなき手を合し下し事無き首を下る、心の中は如何ほどか苦からん　蔦オ、お願ひか、其方が爾う丁寧にお願ひと出るあらば此方は丁寧にお斷り申す丈の事だ　守「でも有ませうが讀で仕舞た其後では何うか私しへお渡しを　蔦「濕ッ濃い奴だなア、讀で仕舞た後の事が今から何うして分る者か、元の通り畳んで此衣嚢へ入れ宿で又讀直す爲め持て歸らにや成らぬかも知れぬから」と何所迄人を馬鹿にするか底の知れざる横着に守雄も今あそは堪り兼、妢陀娥を拂ひ退け目の色變て突々と歩み寄れば此劒幕を見る一同の客仁はサア侍衆の喧嘩ぞと皆腰掛より立上り雪をも撞はず戸の外に逃出し給仕せし亭主までも色を無くして穴倉へ逃込みたり獨り妢陀娥は居も立も成らぬ有樣にて守雄の脊後にウロ〳〵と、兩個の罵り合ふ聲を聞くのみ　守「言せて置けば無禮にも程が有る、サア最後の返事を唯一言聞きま

せう、此新聞を渡しますか渡しませぬか」と手厳しく詰掛るに、荒武者は返事もせずに傍らある彼の脊の低き紳士に向ひ「ヱ、朋輩、此田舍に新聞など見度いと云ふ生意氣な奴の有るのも不思議じや無いか」朋輩と聲掛られし件の小紳士は可笑しとも恐ろしとも分らぬ樣な笑聲にて「イヤサ此方は又是非とも此新聞を見度と云ふ譯が有るのだから、元が此方の新聞あら返せと云ふも無理は無いのサ」一旦斯と決しては一歩も讓らず一刻も猶豫せぬが有藁守雄の氣質なれば斯る面倒なる傍言は聞く暇なし、無手と荒武者の襟を握みて「サアお立成さいと云ひ力任せに打起しつ「武士が此通り作法を盡すに腰掛た儘で居るさへ許されぬ不屆です」流石の荒武者も是にハ引起されて立上りしも彼れも用心にハ怠り無く手早く守雄の手を引解き一歩下つて身を搾ゆるは斯る場合の掛引に充分慣れたる人と知らる、彼れ怒れる守雄の顔を見て「ホヽ、此奴は餘ほど面白い、己の刀の切味を見たいと云ふのか、其

望みなら叶へて遣ふ、コーレ田舎者後悔するな此刀の名も知るまいが不爛白刃と聞て世界の武人が縮込むのは此刀だ先日も獨逸士官の首を刎て其血を研落したばかりだから此刀へ血を塗るは手前の名譽だ」と打罵りつゝ悠々と彼の新聞を折疊みて己れの衣嚢へと収め了りぬ、アヽ君有藻守雄にして心を落着け不爛白刃の名を聞たりせば其持主の誰あるやは兼て噂にも知れる筈にて悪き相手に逢し者哉と早くも後悔を初む可きに彼れ血眼と成れる際とて其名も錄に耳に入らぬは是非も無き次第と云ふ可し

第三回

荒武者は新聞紙を疊みて衣嚢へと納め終り毒々しき笑を浮めて「サア斯して己の肌へ着ければ、最う己を殺す外に取返す道は無い何で手前が其樣に謂み度がるか知らぬけれど、取れる者ならソーレ腕盡で取て呉れ」守雄は燥

立時に非ずと見、强て我心を落着けんと先づ妢陀、讓に打向ひ「妢陀、外から人の這入ぬ樣に入口の戸を閉て置け」妢陀は今までよりも又一入青くなり、諫むる如き眼にて守雄の顏を眺めたれど、最早や後へは引れぬ場合、固より留まる景色なければ言葉に從ひ戸を閉たり、此時は早や一同の客去盡して殘るは荒武者の友なる小紳士と我が許嫁の妻妢陀の二人のみなれば守雄は外に氣を置く所無しと腰なる劍を拔放し其劍先を我靴の皮に當て檢むる荒武者は少しも騷がず、第一に外套を拔き次には皮の手袋を外し猶ほ万一にも躓きて後れを取ては成らぬとの用心にや靴に着けたる刺馬鈴を取除き眼を遮る物無き樣綠廣き帽子をも脫捨たり、斯も悠々と用意して少しも騷がしき所なきは幾戰場を經來りたる剛の者なると問ふに及ばず彼れ頓て四尺に近き不爛白刃を事も無げに扱持ちつ劉々と三振四振空を切りて振廻し四股蹈堅めて嚴然と身を構へ「サア奴何所からでも掛つて來い、刀を

持た儘、此庭で躍らせて遣るから」と云ふ其樣呆せる哉一寸の隙も無き恐しき劍客なり、此用意を見て連なる小紳士は「面白い〳〵」と叫びつゝ手を拍て壁の傍ある卓上の上に登り、娉陀嬢は又生たる心地も無く壇の蔭に身を躲め、恐れに眼を開きしまゝ瞬殺さへもする能はず、茲に至りて守雄は孰れより打込んと敵の樣子を闘る中にも心に一種の慘慘たる疑ひを浮べ來り、若しや此男、彼の憎む可き警視總監婆武が我を殺さん爲にとて佛國より送りたる刺客には非ざるか、此男の新聞紙を横取せし事と云ひ遺恨でも有る如く我を辱しめて止ざりし振舞と云ひ、偶然とは思はれず、我れ年猶ほ若きが爲め斯る所に思到らず一時の怒より此喧嘩を引起せしは、彼れが謀事の壺に落入しなり、日頃より大將軍が我を血氣の勇と云ひ誡めしも茲なりしかト今更ら悔しさに齒を嚙めども詮方なし、此荒武者は此樣を見て「ハヽ已から先身構しては切込で來る暇が無いのか待て見れなら見れと言へ」何を小癪な、又嚇ッと迫上て守雄は刀を取直し、一足下つて構へあがらも猶ほ疑ひは消え遺らず「已が今殺されては事の敗れるは殘念だが、一味徒黨の名前だけは婆武にも分らぬから夫だけは安心だ」漸と斷念めて心を鎭め愈々立會を初んとす、抑も此時代の決鬪は今の決鬪とは事異はり敵が死ぬるか已れが死ぬるか眞實命の遺取りにて今の決鬪の如とく先づ武器の長短を圖かり二人の介添人を定め前以て場所と時間を約束し爭ひの餘温冷たる頃戰ふに非ず、銘々腰に一刀を挿むだけ已れの刀が已の武器なり敵の刀長ければ已れの損と斷念し腹立ば其場所が決鬪場にて其時即座が命の捨時なり爾るに今守雄の劍は彼の不爛白刃より確に七寸の餘も短かく猶又世を忍ぶ身の何も角も成る可く人目に立ぬ樣作りし事とて鍔も殆ど已れの拳を防ぐに足らず其衣類に至りても荒武者は戰場に臨む如き出立にて皮の胴着に身を堅むれど守雄の胴着は柔かなる絹羅紗なり脊丈とても守雄の方二

寸近くも低からん斯る所を見較ぶれば守雄に四歩の弱味ありて敵に六分の勝を讓れり極めて困難の勝負なれど守雄は之に氣も附かぬか、一思ひに突殺さん劒幕にて敵の眼を晦みしまゝ膝を折り腰を落し下より低く彼れを狙ひ、敵は又脊の高きだけ充分に体を反せ頭は後へ引き両の手は前に差延して劒先を守雄の眼に附けたり敵の友達小紳士は丁度守雄の脊後に當り妙陀は敵の脊後に在れば、其劒先の最も危き所に向へる樣も氣味悪き程に能く分れり、最初に一聲、劒と劒と打合し儘暫しが程は聲も無く動きもせず互に呼吸を闘り合ふ休なりしが守雄は「ヤッ」と聲掛て一突衝き更に刀を引く間も見せず二の突を復せしも相手は泰然として拂ひ退け足をも引かずに沼着きたるは宛ながら巌石かと思ふ程あり、是れにて見れば彼れ先づ靜に過ひて守雄を怒らせ疲らせん畧計なり、守雄も夫と察し疲るゝまで戒ふは我利に非ず今のうち一思ひに推片附んと充分の狙ひを定めて又も鋭

く突出し是より凡ろ二十分ほどの間は上と見せて下を跳ね下と見せては上を襲ひ忽ち胸忽ち顔、其激しきと雨霰の如く守雄の持てる細き刀或時は空を切りて叱々と喝響き或時は繩の如くに敵の劒に搦附く事あれど名に負ふ不爛白刃は一たびだも傷よる事なく守雄の目の下を狙ひて少しも離れず面憎しとあせる色を彼れ見て取りてか又も嘲り「ホヽ丸で鍛冶屋が鐵板でも延す樣に打て來るナ、己の劒を金床と間違へては了ないセ　守己れ何を是でもかと言乍ら更に又突出すは今まで蓄へし必死の手にて見事荒武者の脾腹を突貫きたりと思ひの外、僅に劒の短き爲め屆かずして拂はれたり「オヽ今のは旨い相手が已より外の者なら見事遣られる所で有た」と半ば賞め半ば誇りつ最早や自分より打出ても好き時と思ひしか已が言葉の途切れぬうち一突き守雄の眉間を衝く其劒の早きと電の閃きし如くなるを守雄は危くも横に反すに彼れも稍意外にて「フム感心に能く反した手

前も滿更の下手では無いが悲ひ事には師匠に教つた劍術で己の樣な敵に習つた者で無いから最う此勝負は己の者だ、エ何うだ手前の前額の汗は雪の降るのに湯氣が出て居る眞に此言葉の通りなり守雄は最初こそ怒らじと勉めたれ今は眼に血走りて汗ダラ〳〵顏中に流れ初めぬ

第四回

小紳士楢屋(原氏ナアロー男爵相須根(バロン、ダ、アイスチー)巨魁樹部武發(キッヘンブッチ)

敵は唯だ罵しりて守雄を怒らせ疲らせる計畧なれど今は其計畧に氣も附かず益々〳〵焦りて怒狂ふ守雄の危きと云ん方なし、前の方より是等の有樣を見る妢陀嫩の心の內は實に地獄の責苦にて今は恐ちしさも打忘れ蠱の下より潛り出て腰なる刀に細き手を掛け拔き得遣らず立ちつ居つ右に左に

狼狽へ居たるが頓ては堪り兼しと見へ唇頭に指を當て「靜に」との合圖を作し其身ハ其儘蠱の許に沈み込みたり、此有樣には守雄も少し悟る所ありし蚊、火花の如く振居たる劍を持交へ下より敵の胸の當りに附けし儘、熱き息を吹きあがらシリ〳〵と敵の横手へ廻り行くに敵も防ぎあがらに廻初め暫くするうち全くに位地を換へ敵は小紳士に脊を向け守雄は妢陀に脊を向たり此有樣にて睨み合ば其中に守雄の怒りも幾分か鎭りて勇氣も恢復するならんと妢陀が少し喜ぶに引替へ敵は捨置難しと見つ今度は最も守雄の氣に掛る言葉を撰びて「コレ奴手前がアレ程阿闍新聞に氣を揉んだのは何の記事を讀み度いのだ、エ奴何うせ冥途への土產だから己が覺て居るだけ讀で聞かさう」是等の大切ある口上に守雄は再び心を動かさんとするに敵は其効目を見て「第一の項には路易十四世が觀兵式を行ふと書て有た、是か、是か、オヤ平氣で居る所を見ると是では無いと見えるなでは第二項

か、爾々第二項には警視總監婁武が新に陸軍大臣に兼任せられて評判が好いと書て有る第一項第二項に何ゞ有ふと夫等は我が搏ふ所に非ず大事の合圖は第三項にて若しも「羅馬」の二字あらば吾徒の同志は之を大將軍よりの「進め」と云ふ號令と見做し今夜の中に佛國の國境指して進まねば成らぬ次第、此の痴漢に掛合て居る場合に非ずと、守雄は腹のうち沸立つ想ひ、アア痴漢め第三項を何と讀むにや、新聞紙は奪はれても夫さへ聞けば我目的は屆くなりと刀の柄に汗を握りつ息の根を凝して待つ其顏色を見て取りしか「フム第二項には用事は無いのかハテナ第三項には何とか有た、爾々巴里へ外國の急使が着たと有た其急使は羅馬からサ」羅馬からサの一言は守雄の胸に釘打つ如く腐へたり、扨は號令の掛りしか扨は多年の本望を達す可き時來りしか、扨は吾が同士の徒既に此合圖に應じ夫々發足せしなるか我れ獨り後れては一同に何を以て辨解せんと斯る想は、暫たく暇も無く一度

に心に浮出たれば守雄は殆ど我にも無く「ヤ、ヤ、夫はと叫びたるが是れぞこれ運の盡なり、叫ぶ拍子に身の備へ髮筋ほどの隙を現はし、先程より唯此隙の有れかしとのみ狙ひ居たる彼の恐る可き不爛白刃は守雄の第四肋骨と第五肋骨の間をズブリと貫き通したり、炎所の深手に何ぞ堪ゆ可き口より鼻より夥しく血を吐きながら俯便に倒るゝを脊後よ在りし妖陀娥は馳寄りて甲弱き手に抱留しが一旦の恐れ過去りし後と成りては女却て男より強き事あり娥は迫來る涙を胸に湛へて一滴も外に洩さず、嗔に裂る眦を擧げ千歳の後までも憎き彼の面を我が眼に鏤め置かんと云はぬばかりに血相にて荒武者をジロリと睨みしのみ再び彼が方に向ず後は守雄が傷の血を我身より出る血の如く手に染めて介抱すれど最早や恐らく其詮なからん嗚呼伯爵有藻守雄世にも頼もしき大志を抱く身を以て廿有八年を一期とし名も無き草屋に命を殞さば其恨み何の時にか盡んや

勝誇れる荒武者は惜む可き有藻守雄と傷ましき妙陀蹴には呪も留めず手拭を取出し刀の血を拭ひ終り「天晴れな手柄ものだ、ナア此不爛白刀は、エヽ何の樣な敵に逢ても負た事が無い是で先づ今日の役目は濟だ今夜は鞘の滿腔に入れ暖に寢かして遣る」と云ひ心地好ゆに打笑ふ而憎さ、斯る所へ明達なる小紳士は卓子の上より降來り荒武者の手を取りて「何時まで此樣な血腥い家に居たとて仕方が無い、サア行ふ」と促し立て共々に玆を出しが外は雪早や一寸の上も積み一面の銀世界に白き鼻息も目に立たず無言の儘にホテル、ドビルの方を指し凡そ一町も進みし頃、荒武者は我手柄を吹聽せんと思ふ如く「アヽ楢尾君、今夜の相手は近來に無い腕ッ骨の强い奴だつたよ流石の僕も一時は餘ほど危かつた」と話掛るに楢尾と呼ばるゝ件の小紳士は別に感心もせぬ句調にて「ヘン人、ニ男爵相須根君、君は大事の探偵事件を寝武から」と言掛けて脊後を見返り何人も居ぬを見極めし上語を繼ざて

警視總監寝武から言附つて僕の後先に此土地へ出張して居るじや無いか居酒屋で決鬪などして夫で役目が濟むと思ふか」男爵相須根と稱さるゝ荒男も亦四邊りを見廻はせし上「ナニ大丈夫だよ、僕は此度の陰謀の巨魁攝部武發を探偵兼捕縛に來たし君は此度の陰謀を遊說して諸國を遍歷して居る彼の有名な貴夫人を暗殺せよと云ふ命を受て來たじやァ無いか　楢「貴夫人ドコロか皇族だよ、前の皇后陛下だよ、今夜の内に立派に目的を遂げて見せる　楢「前の皇后陛下でも路易王に振捨られゝば今は貴夫人よ其樣な事は孰れにしても君の仕事と僕の仕事は全く別々に言附つたのだから僕が居酒屋で決鬪仕やうと何所で何を仕樣と僕の勝手だ、君から彼是れ批評せらるゝ道は無い　楢「夫れは爾でも詰らぬ者を相手にして」と言掛れば男爵相須根は高き脊を猶二三寸引延して「オヤ〳〵君は今夜の男を名も無い相手と思ひ給ふか　楢「サア彼の剛勇の手練で見れば滿更名も無い相手で

は有るまいが兎に角巨魁の橘部武發より外の者へ目を注るは君の役目で無いと云ふ事サ　想「君にも似合ぬ眼の低い事を云今の相手が即ち巨魁の橘部だよ橘部武發だよ　橘「ヤ、ヤ、何だと　想「驚き給ふな巴里では橘部武發と云はれ此地では有藻守雄と云はれて居るのが今殺したアノ奴だ、是で詠反も陰謀も消て仕舞つた」

第五回

前の王妃織部夫人（原名オリンプ）王妃玻璃英嬢（パリエール）侍女蓮（ロレンザ）従者立夫（ヒリップ）荒武者と小紳士の此問答にて察すれば荒武者は是れ當時壯士隊の大劍客として到る所に恐れられたる有名の相須根男爵にして小紳士は警視總監兼陸軍大臣寝武に使はれて奸智並なしと稱せられたる警視會計長楢尾明な

ると讀者の推せし所なる可く此兩人が此地に來りし用向も大抵は分りしならん

楢尾は今殺されしが賊魁橘部事有藻守雄なりと聞きて驚くと一方ならず何うして其樣な事が君に分つた　想「ナァに、阿闍に居る彼れの同類で裏切を仕た奴が有る夫が今朝手紙を寄越し有藻守雄が町外れの居酒屋で今夕合圖の新聞紙を待て居ると詳しく僕さで知せて來た夫だからアノ通り喧嘩を仕掛て殺したのだ、君は毎も僕を智慧が無い樣に云ふけれど此智慧には感心だらう」楢尾「は少しも感心せず却て不安心の樣子にて「君は彼を殺したが爲に我政府が何れほどの損害を受ると思ふ　想「何だ敵の大將を殺した爲め却て叱られるとは何の事だ其樣な分らぬ政府へは雇れて居られ無いが　楢「夫だから智慧が足ぬと云ふのだ政府の方では彼を生擒る積で國境へ兼てより伏兵を置き待設けて居るじや無いか、彼れを殺すは易い事だ

が、今殺しては同類の名が分らず知て居るのは唯彼れ一人で彼は其名簿を手箱に入れ深く隱して居る事は僕が數ヶ月の辛苦で以て漸く探り極たけれど其手箱が何所に在るかは彼より外に知る者は無い、夫だから彼を生取り其手箱の有る所を白狀させる爲に政府も苦心して居るのだ、夫を君が殺して仕舞へば　想「爾で無い彼が大將に違ひ無いが猶ほ彼よて大將さへ殺して仕舞へば　想「だッり上に大首領が有るからサ、襄武の見込では何でも路易王と位を爭ふ程の貴顯が其首領に相違無いから夫を白狀させぬうちに彼を殺せば今迄の辛苦は水の泡だ」と今は當も憚らず且談し且歩めど十間ばかり背後より白裝束の一人の曲者、雪に足音を埋めながら耳を澄して尾け來るとは此兩個知るや知らずや、男爵相須根は手柄と思ひし我働きの却て不手柄なりしに心附き暫し打驚ぐ体ありしが頓て諦めたる者か「ヱヽ、殺した後で何うなる者

か、外の刀と違ひ此不爛白刀で穿れた奴は二度と蘇生た例しが無い、殺して惡けりゃ外の手柄で埋合すか免職される丈の事だ、君から何も其樣な說教を聞くに及ばぬ君も僕の働きを咎めるより自分で失策をせぬ樣に注意し給へ、君の相手は織部伯爵夫人殿下と云ひ以前は國王に愛せられ朝廷で一同の大臣にお辭宜をさせた女だから迂濶な事は出來ないぜ　想「だから襄武が故々僕を送たのサ織部夫人が路易王を恨む餘り保養の旅行と名を附て窃に隣國の不平家を說集め今此地まで歸て來る所だから之を旨く扱ふは僕より外の者には出來ぬ、僕は幸ひ織部夫人の氣に入で秘密の相談に預つた事も有り夫が爲め今夜も夫人は僕の別莊に一泊する事に成て居るから最う袋の鼠を捕へるより柔い事だ　想「爾すると今度巴里から馬車に積み大事に仕て持て來た大きな機械も矢張り織部貴夫人を招待する道具だ　想「爾サ彼れは僕の工夫で考へた白痴蟲だァノ工夫には襄武も感心し

て褒美に僕を會計長まで上した程だから何う云ふ旨い具合に行くか、默て明朝まで待て居たまへ」と誇る言葉の終らぬうちホテル、ドゝビルの報時鐘は夜の十時を打たれば　相「オヤ最う貴夫人の馬車が着く時分だ」と云ひ是より足を早めてパチエロ街なる別莊の門口に到れば宛も好し縅部夫人の乘れる馬車、雪に輾て着きたる所にて第一に中より立出るは從者と覺しく是も年の頃は先刻相須根男爵の劍に斃れし彼の有藻守雄と同じく廿七八の美男子にて先づ馬の轡を取れば次に十八九歳の美しき侍女と手を引合ひ靜に馬車を出立るは是なん路易十四世の朝に仕へ、曾て天下の大權を握り朝廷一人も其顏を仰ぎ見る者なき迄に時めきたる大宰相故麻擬麟の息女にして路易王の若き頃深く心を寄せられて二世の契を堅めしも其後王の心彼の玻璃英孃に移りし爲め振捨られて怨を呑む縅部夫人あり、顏は黑き覆面に覆たれど昔し路易王を惱殺せし星の如き其眼は今も猶ほ光を失は

ず覆面越に澄渡れり、楢尾明は蚤と見て地に着く程に首を垂れ恭々しく旅の疲を慰め問ひ自ら貴夫人の手を取りて直に別莊の內へと案內しつゝ設の席に入んとするに、貴夫人は言葉輕く「最う何よりも、早く寐して貰ふのが御馳走です、楢尾さん其用意は出來て居ませうネ」　楢「ハイ最う先日からお待受け申しました夫等の用意は殘り無く調ふて居ますゆゑ、直樣お寐間へ御案內致しますが兎に角是にて暫くのお小息を」夫人は脊後に從へる侍女に振向ひ「迚や、先へ行て寐間の樣子を見てお置ぎ、夜中に又戶惑でもすると困るから」と何氣なく言附るも實は大望を抱くだけに孰れに行くにも敵地に入れる心持にて萬一の事あらんを慮かり用心に油斷なき者と知る可し、道と呼るゝ侍女は並び立る美しき從者と樣子有げに目配しして「ハイ」と答へて楢尾の指す寐間の方に立去れば貴夫人は又從者を見返り「立夫や、明朝此地を立つ時の間に逢ふ樣に今から馬車の用意を」と言附るに美男子立夫は「イ

ヤ既に左樣に申附て置ました」と答ふ夫人は此返事を聞き終りて更に此方へ振向らんとするに此時猶又立夫の背後に荒武者相須根の從がへるを見て「楢尾さんアノ方は何方です」

第六回

誰と問はれて楢尾明は「男爵相須根とは答へずして「ハイ彼れは私しの親友です」とのみ答へたり

織部貴夫人は是だけの曖昧なる返事に滿足せしか輕く合首きて其儘設けの席に入り從者立夫を左に置き頓て寐間より歸りたる侍女蓮を右に据らせ其身は兩個の間に腰掛け「何うも〳〵疲れました」と云ひながら帽子と覆面とを取退るに漆の如く黑き髮は一時に崩れて肩に落ち青白き顏の色と相映じて物凄きほど美しく、抑も此夫人の父君なる大宰相麻撒麟は誰も知

る如く伊太利の人にして夫人は其血を受し者なれば他國の女に類の無き一種の凄味あり顏稍や長く眼深く顋も少しく出し方なれど口唇は堅く測り情に脆くして怒に鋭心の奥の測り知れぬ相合なり斯て夫人は楢尾の衆て用意せる佳肴珍味には目も注がず唯其の冷き眼にてヂッと蓮女の顏を眺め更に又立夫を見返り穏かならぬ景色にて二人の樣子を見較るのみ、茲に先づ蓮女と立夫の身の上を記し置かんに蓮は伊太利にて由緒ある家の娘にして宮仕にと巴里の朝延へ住込みしを夫人が作法など仕込む爲め我手許へ引取りて侍女となせし者なり、立夫は其姓を鳥居(原名トリー)と云ひ或皇族の奉公人ありしを夫人が殊の外目を掛けて故々我が許へ請受來り爾來孰れに行く時も引連て深く寵み居るとなり

夫人は蓮と立夫が時々目を見交す樣子を見て最と不快の想ひを爲し心の中にて「最う此儘に仕ては置れぬ、若もの間違でも有ては」と打呟き更に又楢

尾に向ひ「楢尾さん私しの從者は何所へ寐かせます」「イヤ夫々に最う室を與へましたが鳥居立夫さんは私しの室へ、又蓮さんは」と言掛るを　夫「イヤ蓮には猶だ用事が有ます、サ蓮や寐間へ案内を」此命に從がひて蓮は夫人の脱捨し帽子外套其外を片手に持ち片手に夫人を扶け起しつ再び立夫と目を見交せ二階へと上り行くに楢尾を初め一同は二階の寐間の入口まで送り行き茲にて恭々しく挨拶して引退く、其中に荒武者相須根男爵はチラリと寐間の内を窺き彼の白寢蟹に目を注ぎて「フム楢尾の智慧で編出したのは那の白い寐蟹だな、故々佛蘭西から取寄せて那れへ夫人を寐かすれば何う云ふ事に成るだらう」と呟きしも蓮と夫人は之に携はず早や寐間に入り内より戸を締めて堅く其錠を卸したり是れより夫人は直ちに煖爐の前に行き備への椅子に腰を卸せば蓮は着物など片附終りて太儀相にホッと息吐き夫人の背後よ來りつゝ「貴女様、お寐み成さるなら雜とお髪を結びませう

夫人は顏に掛る長き髪を振分て「イヤ私は未だ寐ませぬから　蓮「オヤ貴女様は、今朝早くからの御旅行に定めしお疲れも有ませうに」夫人は容赦なき口調にて「イヤ疲れても是から猶手紙を書ねば成ませぬ早く寐たいと云たのは實は其爲です」蓮は「オヤオヤ」と胸に驚き、殆ど泣聲かと疑はるゝ溜息を洩したり　夫「オヽ和女は定めし眠からうに」と夫人が其顏を打見遣れば蓮は、兩の頬を紅めながらも「ハイ餘りと馬車が搖ましたので毎もより疲れましたが、ナニ貴女様の御用と有れば　夫「イヤ夫に及びませぬ　蓮「では御免を蒙りまして蓮は下ッて宜しふ御坐いますか　夫「下ッて和女は、何所へか寐に行き度いのかヱ　蓮「ハイ那の楢尾さんに願ッて此お次の室へ寐床の用意を仕て貰ひませう、御用の時は何時でも飛起て參ります」夫人は少し眉を顰め、傍の小卓に杖きし手を前額に當て暫し考ふる体なりしが「イヤ〳〵、次の室へ行かず其寐蟹でお休みな、私しは朝まで書明す積だから　蓮「でも

貴女樣、私くしが此お寐床では罰が當ります」夫人は少し自烈し樣子「私しが許せは好でば無いか、和女は何時まで私しの言葉に逆らひます」叱られても猶ほ行乘て」と申しても此立派な」とて當惑けに寐蠶の方を見廻すを　夫「ナニ立派でも一夜だけの用意だから氣樂する事は無い、サァお休み」今は返さん言葉も無く、此言附に從ふ爲め如何なる事に成り行くやは神ならぬ身の知る由なく「アヽ勿体ない」と呟きつゝ疲れし足を引摺「では御免蒙ります」此一言を後に殘し、おづ〳〵寐蠶へと上りしが、十分間と經ぬうちに早や安々と眠りし如く、呼吹の調子能く揃ひて聞ゆるは如何なる夢を見るにやあらん、後に夫人は唯獨り椅子に沈みて考へ入り「アヽ本に〳〵侍女の身が羨ましい、嫉妬と云ふ心の責苦も未知らねば人をも恨まず恨まれる事も無からうが夫に引替へァヽ最う思ふまい――とい思ても――振捨られた今までの苦みも此後の苦みに比べては――斯う云ふ中にも月日と共に顏容は頽

れるで有らうし」と云捐て悄りと嘆き「イヤ〳〵最う我おがら愛想の盡る老木の花と枯萎れて居るかも知れぬ」と云つゝ姿鏡に立て向ひ苦勞は轉ど山鳥のおろの鏡に寫し見つ「オホヽ、目許とても未だ變りはせぬ、いつぞや路易王が戯れに指の先へ卷附けて濡羽色だと云はれた時と毛の艶も同じ事異り果たは唯路易の心ばかり――ェヽ、今は此方の心とても十九や廿歳の娘では無し今度と云ふ今度こそは路易を足許に鯖伏せてアノ玻璃英めにオホヽ、ホヽヽ」打笑ながら一歩〳〵、背後の椅子に又身を置き再び思ひに沈むうち笑顏は何時しか又も曇りて前にも增る恨みの色となり「賴みに成るは妬陀の所夫有藻守雄ダッタ一人、彼れとても便りが無し、賤い身から引上げて寵愛して遣る立夫まで何うやら此身を振捨て侍女連と怪い素振、ェヽ、最う最う我慢と云ふ我慢は盡きた今直に立夫を迎し詮議して〳〵仕果せねば」と椅子を蹴返し立上り怨みに燃る血眼にて屹と彼方を打見遣るに此時

最も恐ろしき有様の目に留れり、斉を何ぞと云ふに蓮の眠れる白寢臺は聲もせず音もせぬ間に徐り〳〵と兩の端を捲上げ來り蓮を卷込ん有様なり恐に眩む眼とて此有様は見擬ふ可くも非ざれど唯だ事柄の餘りに不思議なる爲め只呆れに呆れ果暫し立すくむのみなりしが、此儘に捨置きなば十分と經ぬうちに寢臺は桶の如くになり蓮は其中に包まれて塞殺さるゝのみなれば夫人は漸くにして夫と心の附くと等しく一切の恨みも悲みも立夫の事も打忘れ、唯だ天然の良心にて寢臺の傍に走り寄り眠れる蓮の肩に手を掛け「蓮や〳〵」と呼起すに蓮は猶ほ夢路にて眠き眼を開きもせず寢顔の片頬に笑を浮めて「嬉しいよ、オヽ、立夫さんか」と寢言を吐く此一言に夫人は毒虫にでも螫されし如く「アッ」と魂消て飛退きしが唯だ見るうちに夫人の顔は再び、怨みに燃上る物凄き相に返れり

第七回

寐首にまでも「立夫」の名を言ひ「嬉しいよ」と呟くからは最早や疑う所なし、侍女の身も顧みず今までの恩義にも憚からず、我が最愛の男を偷みて罰は當らずと思へるかト纖部夫人は見る〳〵眼に血を濺ぎ最怨めしげに齒を噛鳴して立すくみぬ、其間にも彼の恐る可き白寢臺は徐り〳〵と蓮女を捲込み、蓮の命は今五分間、三分間、一分間にも盡なんとする所まで推寄せたれば夫人は殆んど見るに得堪へず「オヽ恐しい」と打叫びて兩手に顔を隱せしが如何に怨みの寡れば迚、惜む可き花の盛の一少女を見殺しにせらる可きや、一髮の猶躊も無き斷末間に及ぶを見て夫人は忽ち後悔の念を催ほし「イヤ〳〵、此儘には死なされぬ、助けた上は實問ふて實を吐かせ愈々立夫の心變りと云ふ證據を見ねば」と呟き猶ほ終らぬうち再び白寢臺に馳寄りしも此時は早や後の祭りなり、捲上りて少しばかり開き居たる兩の端は駛と蓮

女を卷込みて宛も桶の如くに成り、空氣の通ふ空間さへ無からんと思はるゝ程なれば如何とも詮方なし、夫人は見開きし目を瞬きもせず只管ら呆れて太息を吐くのみなるに此時天井の上に當る三階の一室にて誰やらん徐ろ〳〵と蹈む如き足音聞こゆ、其樣宛も寢そびれて床を出で室の内を行きつ戻りなするに似たり是れ若しや鳥居立夫には有らぬか彼れは楢尾が自分の室へ寢かせるとの事なりしが、此家は三階の作りにして外に楢尾の居間有りとも思はれず、爾なり〳〵、三階が彼れの室にて今歩めるは確に鳥居立夫なり立夫は何が爲に歩めるにや彼れ道々も今日は痛く草臥れたりと言ひし程なるに寢そびれる事の有ふとも思はれずト斯く怪み來るに連れ自づと夫人の胸に浮ぶは又も忌はしき疑ひあり、エヽ彼れ淑情男め、蓮と忍び逢ふ約束にて今か〳〵と蓮め來るを待つ者なちん待たば待て曉方まで待明かせ二度と再び蓮め顏見られる事では無い、アヽ是だけでも切てもの

腹癒だと、忽ちにして怒り忽ち怨む、夫人の心中は殆んど糸の如しと云ふ可し、其あつて足音は鎭りたれば夫人の心も稍や鎭まらんとし今まで思ふ隙の無かりし事まで少しづゝ思ひ出すに至れり、去るにても此の白寢蟲は誰を殺すが爲にとて此室へ置きしにや侍女蓮女が此寢蟲に上る可しとは何人も思はざる所なれば、我が身を殺すの爲なると慮ほども疑ひなし左すれば親友と思ひたる楢尾明も我が敵なり是に就けても思ひ出すは巴里を出立するとき、我が身の上を危しと云ひ腹臣の中に最も恐る可き老敵ありとて切に我が身を引留んとしたる梅眞女（原名ラ、バイシン、傳い後に出づ）ころ我身に殘れる唯一人の友なるにや、路易王に振捨られし以來、彼れおそいと心を許し及ぶ限りに寵愛したる鳥居立夫まで我が身に負く程なれば其他の者の頼みと爲らぬい怪むに足らぬとい云へ、期くまで頼り無き境遇に落入らんとは今が今まで思はざりしト流石氣丈の夫人なれど椅子の

衷に泣沈み、立上る氣力も無きかと迄に思はるゝ程なりしが、此儘茲に夜を明しては如何なる事に成行く可き、今にも彼の楯尾明が計の旨く行はれしやを見極めん爲め此室へ入來るは必定なり其時我が身が死せずして侍女蓮が死せしと見れば彼れ已れの謀事を確に我身に見拔れしと知り如何なる事を爲さんも知れず、宵にも見れば剛らしき荒武者の彼れが背後に從ひ居たるも萬一の時の用意ならんも知れず、眞逆に皇族の肩書ある我身を捕へ暴亂に縊殺すなどの振舞はすまじきも智慧に捷き彼れが事なれば又も何かの工風を凝し白寢臺の失策を取返さんと計むは必然なり、何にしても此所に一刻を送るは一刻の危きを冒すに均しければ夜の明けぬうち逃去るの外は無しと夫人は漸くに心を定め椅子より立ちて四邊を見廻すに蝋燭の火は燃殘りて暗淵く、廣き室森々と物靜かにして、襟元よりソッと魔風に震はるゝ心地ぞせらる、殊に猶ほ恐しきは彼の白寢臺既に蓮女を殺し終り

て、初の如く壁もせず、音もせぬ間に徐り〳〵と其兩端を延來り、今は蓮女の死骸を元の通りに現して、桶の如く卷き居たる無慘の形は痕をも留めず是れ何等の微妙なる機械なるぞ（譯者曰く白寢臺の事は今猶ほ佛國の公書に存し其構造方をまで記せる者あり勿論疑ふ可き事に非ず）夫人は此有樣を見まじとすれど眼自づに蓮の死骸に引附らるゝ如く其外を見る能はず、憐む可し蓮の死骸は寐たる時の儘なれども末期の苦みは充分其顏に現れて開ける眼は怨めしげに夫人の顏を睨むかと疑はる此の死骸の傍に在りて一夜を明さんとは男子と雖も爲し得ざる所なるに況してや女の身にして殊には幽靈の說盛は行はれし二百年前の事と云ひ、夫人は其上伊國人の癖として死骸を恐るゝと最も甚だしければ、今は一刻も此室に留る能はず、恐ろしさに我を忘れて窓の戸を開き見るに茲は地を離るゝと殆んど二丈にも近く飛降ると叶はず、左すれば戸口より出るの外あしと其儘又も戸口に

到れば茲にも堅く錠を卸せり、鍵は無きやと見廻すうち窓より吹入る風の爲め蠟燭の火は消えて、時ど恐しき室の中は地獄の如き暗となれり

第八回

地獄の如き暗の中に夫人は只管に戸を推開んと揉搔ども戸は堅くして少しも動かず、其中にも背後より死人の起き來りて冷たき手にて我が首筋を撫る如き心地せられ今は恐しさ一方にて戸と戸の引手に縋み附しが又思へば此戸は是れ外より錠を卸したる者に有らで内より遽が鎖せし者なり左すれば鍵は確に遽の衣嚢に在る筈なり、是だけは思ひ出せしも如何で此の暗闇に、死骸の衣嚢を探らる可き、唯だ思ふ丈にても身の縮むほど氣味惡ければ、今は早や詮方なし、假令ひ首の骨を衝折て死ぬれば死ね窓より飛出る外は無し、地上に雪の積れるは我身を受くる蒲團にも等しきゆゑ、厚き外

套に身を包まば助かちぬ事も有るまじと、必死の勇を集め來り、探り〳〵文宵の間に遽が壘みて椅子に掛けたる外套を取上るに何やらん戛然と音して椅子の足に當り更に床へと落し物あるに似たれば若しやと思ひて身を屈め絨氈の表を撫づるに有難し〳〵手先に障るは一個の鍵なり扨は遽が此外套を壘みたる其上へ載置きたる者なる可し、是さへあれば窓より飛ぶにも及ばぬ事と再び戸の酢に馳寄つて錠を外すに思ひの通り戸は苦も無くし開きたればソッと廊下に立出しが茲には猶ほ常夜燈の消燃りて微に四邊を照せるにぞ殆ど蘇生の想ひを爲し樓子段の方に行き掛ればアヽ如何に宵に見し恐しげある荒武者は四尺に餘る大刀を傍に置き廊下の彼方に眞一文字に寐塞がれり、是れ疑ふ迄も無く主人楢尾が斯る事の有んを慮ばかり我が室を番する爲め茲に置たる者なる可し、夫人は虎の口を逃れて茲に龍の顎に臨む心地、疾胸を突きて立留りしも又暫へ見るに此寒き夜に

寂寥も無く斯る所に横はるは餘ほど酒に醉ひたる者にして前後も知らぬに相違なし彼れの目を覺さぬ樣、密かに通り過んものと其の足の方に廻り靜に〳〵と辷り去り漸くにして向に廻りヤレ嬉しやと思ふ間も無く荒武者の猿臂は容赦も無く夫人の裳を確と捕へて「コーレ何所へ行く、幾等酒に醉て居ても戰場を蹈だ丈に忍び足を聞、洩す男では無いぞ」と云ひ酒氣を芬〳〵と匂はせつゝ徐ろに其頭を擧ゲ來る、夫人は全く死地に入れり拂ひ去らんカも無くブル〳〵と震ひ乍ら徒ら」に顏を負くるに、荒武者は猶ほ廻らぬ呂律にて「コレ美人、其樣に恐れる事は無い斯う見えても粹事知らぬ滿更の野暮で無いから宵にチラリと睨んで慢た紙部貴夫人の目を偷み三階の情夫に逢に行くのだな、何だ其樣に手ばかり合せてコレ顏を見せろ其の美くしい顏を、エ益〳〵顏を傍向る所は千兩の風情だぜ、耻しいのか、オヽ夫ほど耻しけりゃア」已の日を一寸按吻で封じて行け爾すれば夜が明けても誰にも

云はずに居て遣るワ、厭か、夫も厭なら此裳を捕へた儘で此家の主人を呼起すぞ、サア何うだ、サア」と裳を引きつゝ立上り來らんとす、此樣子にて察すれば彼れ紙部貴夫人を侍女蓮と思へる事明白なり、是だけは却て安心の樣なれど佛國第一の貴高夫人と仰れたる身を以て侍女と見違へられ斯る痴漢に戲れらるゝ境涯にまで落しかと思へば悔しさ悲しさ胸に迫り、今や將に痴漢の面に唾して我こそは故の大宰相麻撒麟の息女、國王易路の未婚の妻なるぞと言退て叱り懲さんかト怒れる言葉は唇頭まで出たれど、夫ところは益〳〵身を危くする元にして大望の爲には斯る辱しめも忍ばねば成らぬ場合、夫人は迫來る涙を呑込み、傍向けし顏にフッと常夜燈を吹消しつ、柔かなる手の甲を荒武者の口に當るに彼れ美人の接吻なるとを疑はず、身を震はせて啜り鳴す、其暇に夫人は彼れを突退けて辿りながらに階子段を下り行くは如何ほど辛き事やらん、後に荒武者は起直りて、暗の中に耳を澄ませ「オ

ヤ〳〵、三階へは上らずして下の方へ降て行たゞ、ヤ、ヤ、大變だ侍女かと思へば繊部夫人だ、エ、爾とは知らず――、先ァ、先ァ、是は先ァ」と且驚き且呆れ其儘、大刀を杖にして立たれど、酒氣充分に廻り居て蹈足さへも定まらず「ア、大變な事をしたと云ひながら尻持突き、酔どれにも無く恍惚として何事をか考へ初めぬ

第九回

夫人は荒武者が恍惚たる間に玄關より門の方まで忍び出るに、降る雪は早や一尺よ近く積み風さへ強く面を打て寒さ一方ならざれど幸ひ門番も寐鎖りし樣子なればソッと潜戸を推開き戸表へとは出でたるも是よりは孰れを當に迎り行かん、此頃のブルセル府には墺國の皇帝龍甫德の腹臣雷鼠拉伯を初めとし佛國を憎み路易王を怨むもの到る所に潜み居る有樣なれ

ば夜さへ明れば身を寄する所多けれど、夫までを孰れにて明す可き、左右の思案に呉るゝうち彼の荒武者が夫と悟り追掛け來るやも圖られねば、孰れを宛と定めも無く唯だ身体の向くが儘に柔かある絹靴を深き雪の中に蹈込み〳〵轉びながらに後をも見ず幾町と無く逃去りしも其中に靴の心まで溜通り足の先千切るゝ程の冷さを覺え最早や一歩も進む能はず「誰か助けて」と泣聲にて叫び立れど答ふるは唯だ風の音のみ斯ては果じと氣を勵し起上れども又倒れ、倒れては又立上ると斯ること幾度に及びし末終に魂靈き氣衰え、精神までも疎とりと遠くなりて其所に絶入りしが良ありて何人が我身を抱起さんとするに心附き漸くに顔を上げつゝ「ア、何方か知ませんが何うか近邊の宿屋まで連て行て下さらば」と虫の息にて訴ふるに助けし人は夫人の高價なる外套の手障りに驚きし如く「オ、家も無い乞食の行倒れかと思ひ、可愛相だと抱起したら、何だ詰らぬ絹の服を着て居るワ、此樣な

立派な身分で雪の中に凍えるとは定し心柄で有う、心柄で苦勞をする其樣な不了見な女など助けて居る場合で無い、此方は生死も分らぬ大事な主人を控えて居て、氣が揉めて氣が揉めて成らぬ哩、夜の明るまでには誰か又身体の暇な者が通り掛り拾ひ上げて呉れるだらう、夫まで茲で待つが好いワ」と言捨て立去んとするにぞ、夫人は殆ど堪へ兼ね夫は餘り邪慳です織部夫人も云はる〻者が此ほどに頼むのに」と打嘆けば男は悔り振返りて「ヤ、何だ、織部夫人、同じ名の織部夫人が二人は無い」と云ひながら夫人の顔を引上ゆつ雪に透して篤と檢め「イヤ是れは貴女樣で有ましたか、何うして先ア此所に」と云ふより早く輕々と抱上げて已れの背へヒラリと廻し、二の語を繼かずに負ひ去らんとす、夫人は更に合點行かず「コレ待て、待てと背中より聲を掛れど彼れ宛も小兒でも背負ひし如く引締て動さず何の苦も無くス〻〻と歩み去るにぞ夫人は夢に夢見る心地「コレ私の名を知る其方は誰

しや敵か味方か、名は何と云ふ」男は猶も歩み乍ら「オ、名を云ふても貴女樣には分りません、今夜主人の敵の行く先を見屆ける爲め荒武者の後を尾け宵からパチエル街の或屋敷の裏手で内の樣子を伺ふうち、餘りの寒さに腰の酒瓶を取出して、グビリ〻〻と遣過てワイ庇の影で寐込で仕舞ひ今し方惡風に目を覺せば屋敷の内はヒッソリと靜だから朝まで居ても無益と知り夫に又主人の生死も心許なく此通り歸り掛けて、間らず貴方を救ひ上げた御覽の通り背中の廣い奴です、昨年主人の伴をして巴里へ行き、貴女樣のお姿を馬車の外からチラリと窺ひましたけれど貴女樣は未私しめの顔は御存が有りますまい」と云ふ言葉は粗末なれど極て慨しやかに明ゆるは何しろ味方の者あると確なれば夫人は初て安心し「シテ其方の主人と云ふは男、妬陀鐵で御坐ります」夫人は奴の背を搖る程に打驚き「何だ、アノ妬陀の下僕、夫では聞た事の有る頑平（原名ナリガンベール）とは其方じや無いか」男は

聲高く打笑ひて「アハヽヽ、奴めの諸とぬ名前が皇族のお耳にまで入ましたか、此奴ア低い鼻が高く成る」夫「シタが今主人の生死も心許無いと云たは妃陀の身に何か怪我でも」妻「イヤ怪我したのは妃陀樣では有ません、有藻守雄樣です」夫人は再び驚きて「アノ有藻が怪我したとは何う云事で」妻「私しも詳しくは知ませんが、何でも賽武の廻し者と決鬪して、傷けられたと云ふ事です、私しが居たならば其廻し者の首を一捻に捻切て溝へ叩き込で呉れますのに私しが昨日から使ひに出て此土地に居なんだばかりで取返しの附かぬ事に成ました歸て見れば唯た今曲者が立去つたと云ふ所ゆゑ、死骸の樣な守雄樣を妃陀孃に任せて置いて直に其後を追掛けましたが、何でも警視會計官の楢尾の別莊に居る奴です、斯う本人さへ分つて居れば敵は何時でも打てますが夫にしても名前だけ聞て置度いと思ひ、裏手の方で下僕か誰かの出て來るのを待つ中に今云ふ通りツイ寐込で仕舞ひました。

今夜で三宵と云ふ者は夜の目も寐ずに方々を馳廻つた爲め何時に無く寐込だのは人に聞れても耻しいが今更ら致方が有ません」夫人は背の後にて左すれば我身を引留し彼の荒武者が有藻守雄の敵ならんと含きしも何樣守雄の身の上が氣遣はしければ是より又口を開かず奴の歩む儘に任せ置くうち頓て町盡れなる或家の入口に着きたり

第十回

奴頑平が纖部夫人を負し儘、來り着きたる町盡れの家と云ふは宵に守雄が荒武者相須根に刺れたる彼の居酒屋なると讀者の既に察したる所なる可し頑平は先づ戸を叩くに内より亭主が開迎へたれば雪をも拂はず無雜作に歩み入りて店中を見廻しつゝ「コレ亭主、宵の怪我人は何うされたか」亭主は頑平が脊の荷物を怪少に眺めあがら「連のお方が酷くお嘆きの樣子ゆゑ

早速雷鳳拉伯のお擁の醫者樣を迎へて來て夫々手當を盡ましたが！　亭「手當を盡したが夫から何うした　亭「イヤ、何分の重傷ゆゑ極々靜に寐かして置かねば迚も一命は助からぬとの御診察で夫ゆゑ三階の客間へ舁上げお連の方が附切て介抱してお出ですが、朝まで何も知らずに眠るなら事に由ると療治が屆くかも知れぬが若し其うちに目を覺し心を騷がす事でも有ては迚も助かる見込は無いと餘ほど御心配の樣子でした頑平は心配な」「ヤレ〳〵、夫は困た事をした、だが亭主、三階の間が病人で塞がれば外に此の方を朝までお泊ヲす室は有るまいか　亭「室は扨置き寐臺さへ有ませんが　亭「オヤ〳〵、夫では己が一走り何所か宿屋を叩き起し能く賴み込で來やう其間此の貴夫人に氣を附けて」と云ひつゝ夫人を腰掛臺の上に卸せば夫人は最と有難かに「イヤ頑平とやら最う夜の明るに間も有るまい朝になれば件の者も探しに來やうし此方からも呼寄せて玆を立去る用意をするから

一夜を茲で明しても苦う無い」と遠慮の言葉を聞も終らず早や頑平は立去りたれば、後に夫人は默然として今宵の事を考へ見るに重ね〳〵の不幸と云ふも皆寒武のする業にて殊には味方の先鋒とする有樣守雄まで害せられしと云ふからは寒武の手先は既に蛛の巣を張る如く隈なく行渡れると明かなり、事猶ほ破れしと云ふには有れど何さま用心が肝腎なれば今夜此所に連來られしを幸ひ、妙陀に逢ひて夫等の心をも傳へ置かんと暫しの内に思案を決し、立上りて亭主に向ひ妙陀の室へ案内せよと命ずるに亭主は當惑氣に頭を搔きしも夫人の立派なる服粧と決心したる面色とに肝を挫がれ否を唱ふる勇氣も無く、徒らに口の内にて「醫者樣から誰も三階へ上ては成らぬと制られて居るのに、若し之が爲め怪我人に變が有ても私しは知りません」と打咳き不勝無性に手燭を取り言葉に從ひて案内せり、固より矮狹き家なれば三階と云ふも名のみにして實は物置同樣なる天井裏へ組

末ある雜作を施し二室を作りし迄にして階子とても夫人の足に慣れし廣やかなる作りに非ず、纔かに兩手に攀ながら這上る程の粗造なる組立なれば、夫人は凍る足の蹈辷るを恐れながら漸くに上り盡すに此音を聞き妈陀鐵は何事かと怪む如く、同じく手燭を手に持ちて闕の上に現はれたり、姿は男の作りなれども男の如く胸の苦勞を推隱す力は無く、幾多の悲み悲く其顏に現はれて兩の頰に淸紅き血の色を浮め、開きたる眼は八方に配りて忙がし、夫人は亭主の降り行くを待ち、突々と傍に寄り「妈陀」と一聲呼び掛るに、妈陀は痛く打驚きしも眼れる怪我人を驚かさじとの用心は寸刻も忘れねば敢て驚きの聲を發せず、片手を胸に睨と當て騷ぐ動悸を推鎭めつ、即て合の戸を背後にメめ、細く語く如き調子にて「何うして先ア貴女樣が　夫「變つた所で逢ひました」と言つゝ夫人は有合す古箱を椅子に代へ之に疲れし身を降して「妈陀　夫「ハイ　夫「和女の苦勞は何も彼も聞て知た、私しも茲へ來る程ゆゑ樣々の苦勞は有るが夫は先づ後として何よりも氣に掛るは手箱の事「手箱と聞て妈陀は再び深き目を見開きしも頓て高氣なき躰に返り「手箱とは何の手箱ですが　夫「コレ〳〵　妈陀、和女が所夫の秘密を守り爾う隱すのは尤もだが、和女の預つて居る事は守雄殿から聞て能く知て居る、同じ仲間の同類へも容易に知らさぬ秘密ゆゑ和女は守雄が此の纖部にも云ふて有るまいと思ふだらうが纖部が夫を知らいで何とせう此度の陰謀とても有藻守雄が先鋒て先づ十餘人の決死黨を引連れて巴里へ乘込み、路易王を行幸の道に待受け擒囚として國境へ引上る夫を合圖に雷鼠拉苗が外援隊の長と爲り隣國へ命を傳へ四方一時に佛國へ兵を向け、內には諸耳曼的を初め其他の地方鎭靈が悉く謀反すると云ふ夫等の打合せも知て居れば此度の軍用金が路易と位を爭ふ或皇族や寵武を憎む或政治家から出て阿蘭亞武的達の銀行頭取番具露英に預て有ると云ふ事までも知されて居る

此織部に和女は驚すにも程が有る」と怨しげに妃陀の顔を見詰るに妃陀も亦怨めしゆに「私しがナニ其樣な廣い事柄を知ませう、私しは唯だ所夫を大事と思ふばかり所天が何の樣な謀反をするか又誰を怨んで居るか其樣な事には目を閉ぢて何にも知ずに所天の言附を守る丈です、所夫が之を預けると云へば預り、所夫が誰にも云ふなと言へば、假令ひ殺されても言ひませぬ其樣な手箱とやらも縱や所夫から與つたとした所で何方樣へ渡せとか話せとか所夫から云はれる迄、渡しも話しもせねばこそ所天が此通り私しを邪魔にもせず戰場へまで連て出るでは有ませんか、假令ひ恩の有る貴方樣にも所天の秘密は代られません」凜乎として言切るは甲弱き女の口なるかと殆ど怪まるゝばかりなり、夫人は少し腹立ちし樣なりしも又思ひ直せし如く「イヤ爾まで云ふなら安心するが實はアノ手箱には同類の連名帳を始め其他此度の事件に係る大事の書類も入て居るし、夫に此節益々(鞆武の詮

索も嚴くなり、既に和女の所天を初め私しまで此通り苦められる程だから若しや彼の手箱が和女の手から奪はれては成らぬ故、更めて此織部が預らうかと思ひ言來るを皆まで聞かず「貴女樣は妃陀の心をお疑ひに成ますか妃陀は甲弱き女だけに此身を所天に任せて有ます所天の心は身に替ても守ります、若し明朝にも所天の口から巴里へ行て鞆武と國王とを刺殺せと云るれば何故とも何うしてとも問返さず妃陀は唯だハイと言て獨りで宮城へ入込ます、手箱とやらも若し所天から預つて居るならば何方にも御心配は掛ません」夫人は今更の如く妃陀の心の確あるに感心し「アヽ女の愛情ほど世に恐しい者は無い」と獨語ち更に又「では安心して分れやう、守雄の傷が全快せバ織部が巴里で待て居るゆゑ早く佛國へ乘込めと傳へてお呉れ異樣なる言葉を殘し夫人がやをら立上れば此時次の間より聲「ウーン」と怪我人の呻く聲洩聞にしにぞ妃陀は夫人を階子の下まで送りもせず氣遣し

げに元の間に退きつ夫人は下へと降り去れり知らず兩女の再會は何れの時如何ある事情にやあらん

第十一回

却て說く彼の白寨臺を以て織部夫人を無き者にせんと計みたる楢尾明は翌朝織部夫人の逃去りて却て其侍女の死せるを見、殊の外驚きたれど如何ども詮方なければ事の落度を荒武者相須根の不注意に歸し痛く相須根を責めしのみか猶ほ巴里なる寰武に向ひても細に其旨を上申したりとなん、去れど彼れ世間へ對しては聲はども織部夫人を殺さんと計みしなど知せては大事ゆゑ秘し隱しに推隱し通例の死人を遇ふ如くにお運を遇ひ早速醫者を呼びて其死骸を檢めさせしに醫者も是と云ひて疑ふ可き廉なければ卒中風の類と見立て其日の內に近邊の或寺へ葬りたり唯だ織部夫人の

失跡に就ては彼れも聊か心配したれど多分夜の中に何事をか思ひ出し急に立去りし者あれば明日にも必ず歸り來らんなど言紛らし何氣なく見せ掛け居たり去れど此事に就き最も當惑を極めたるは夫人の從者島居立夫にして彼れは唯一人取殘され此後の事を如何にして好いんか更に分別も附ざれば今にも夫人より何事をか差圖し來るならんと一日二日を待暮せしも更に何等の便りも無く、唯だ下部共の噂話に町盡れの或宿屋に織部夫人に能く似たる立派なる泊り客ありと聞たるも夫だけにては何の助けとも成らず三日目の日は殆んど鬱ぎ入り、楢尾より與へられたる一室に閉籠り吐息つくく考へ居たるに此所へ楢尾明は何かニコ〳〵と打笑ひながら入來り「オヽ島居さん又其樣に鬱いで居るのか男にも無い些と氣を廣く持給へな」と云ひ慣々しげに立夫の前に腰を卸せり立夫は少し怨む体にて「氣を廣く持てト仰有つても此後の事を何うして好いか少しも私しには分り

ませんから　撞「ナアニ君が心配する事は無いよ、アノ樣な氣の輕い夫人に使はれて居れば此樣な事は有うちと思はねば成らぬ荷物其外は拙者から巴里の夫人の邸まで送り屆ける、少しも君に心配は掛無いよ、立「イヤ荷物などは捨て仕舞ても惜いと仰有る夫人では有ませんが、此儘夫人に捨られては私しの身が方向に困りますから」楢尾は聲高く打笑ひ「何だ人、其樣な氣の小い事が有る者か、君も侍女達を可愛がれば初から夫人に捨られる積で居ねば」立夫は顏の色を變へ「何と仰有ります　撞「隱し給ふな拙者は何も彼も知て居るよ夫人は燒餅が半分でフラ〳〵と出て行たのだから君が再び夫人の機嫌を取り夫に依て出世しやうと思ふのは間違ひだ、見給へ夫人は此後君に仇をするとも決して君の爲を圖つては呉れぬから、トサ斯う云へば驚くだらうが夫人ばかりが主人では無い最も現政府に力を得て時めいて居る大政治家を主人に仕たまへ、ユ君、茲等が牛を馬に乘替る機械だらせ」此甘口の言葉を聞き立夫は心配の一層弛みたる如く、兩の眉を開きたるも忽ち又曇込み「其樣な有力な政治家に通傳でも有樣あらナニ心配は致しませんが、名も無く手柄も無い私しの樣な者が何うして有力な政治家に引立られる事が出來ませう」と打かこつ楢尾は腹の中にて此奴仲々の湖情者だ夫人の事を心配して居るかと思へば爾では無く唯だ自分の出世の道が停つたのを心配して居る、其樣な男だらうと見て取た已の眼力も剛い者だ併し此度の役目を任すには此男に優る者は無いテ、男嘗相須根の樣な奴は女に欺される事は有ても仲々女を欺すなど云ふ事は出來ぬが斯う云ふ奴は爾で無い女を欺す樣に生れ附て居る顏附は男でも惚々する程美くしく爾して口前は上手でサ、お負に心が湖情と來て居るからアヽ實に能く出來た人間だ此男に秘術を盡させ夫で心が動ぬとならバ妃陀孃は女じゃ無い水石だ云ふ者だ」と何か分らぬ事を獨語ちつゝ再び聲を發して「何うだ君、拙

者が周旋して君を大政治家に取持ふじや無いか」立「夫は少し考へて「エ、大政治家とは何方です」楢尾は醫師が劇場を讃す如く一滴〳〵其言葉に用心じて「大政治家と云へば一時に二人は無い、大宰相利世流が死でからは麻撒麟サ、麻撒麟が死でからは僕の主人の褒武さ何うだ君、褒武が君を屈ひ度いと云つて居るが「エ君、褒武と織部夫人と何方を取る」此上も無き嬉しき問に立「夫は全く今までの心配に打て變り、美くしき顏を猶ほ一層美くしくして「御申談やせう、私しをおなぶり成さるのでせう」楢「ナニ申談など云ふものか立「でも褒武樣と早や樣附にして)が私しなどをお使ひ下さる筈が有りません」楢「褒武は使はずとも拙者が褒武から誰か適當の人物を見立て屈入れて呉れと頼まれて居る」爾すれば褒武が屈ふに在らで實は褒武を名前にして楢尾が屈ひ入るゝなるか、楢尾の私しの屈人ならば出世しても多寡が知れさりと又少し熱心を冷し掛け「左樣サ、屈はれた上、何の樣な事をしますか

能く役向を伺つた上で無ければ」楢「役向は極々君に適當の仕事だよ」立「報酬は」楢「報酬は拙者の目鏡で定めるのサ」立「では詰り貴方の屈人です」と意氣込益々詰り掛けたり

第十一回

奸智に掛けては並び無しと稱せらるゝ楢尾明なれば立夫の意氣込益々詰り來るを見ても更に驚く樣子なし「今に見ろ手を合せて已を拜み何モ〳〵と泣附て來る樣になるから」と心の底にて喞りつゝ、靜に衣嚢より、何やら認めたる一枚の紙を取出し「烏居さん拙者の屈人だか、褒武の屈人だか之を見て判斷し給へ、褒武は充分の滿足を與へずに人を使ふと云ふ樣な其樣な怪狗臭い政治家では無いからヨ」立夫は何なるにやと其紙を受取り見るに倆は抑も如何に陸軍大臣褒武の署名したる正式の辭令書にして「國家に對し

盡したる其方の忠義を賞し其方を佛國陸軍大尉に登す者なり」との文句を記し宛名と月日とは記さずに殘しあり立夫が讀み終りて打驚く樣を見澄し「何うだ鳥居さん寒武は實に大政治家だらう、拙者に適當の人物を雇入させる爲に此樣な無名の辭令書を渡して有る、陸軍の大尉と云へば生涯鐵砲を擔でも登る事の出來ぬ人が幾等も有る其の位地を誰にでも授けようと云ふのだから隨分心が廣いじや無いか、誰でも拙者の眼鏡に叶ひ、雇れやうと承諾すれば拙者が直に此辭令書へ其人の名前を書入て渡すのだ爾すれば其人は其時から直に陸軍大尉と云ふもの、何うだ君陸軍大尉に成る氣は無いか氣は無いかとは勿体なし、立夫は忽ち打て變り「何うか宜しく願ひます、私しの身に出來る事なら何なりと致します、彈丸雨霰の中を潜るは云ふ歌及ばず不肖鳥居立夫の一命も今日から寒武樣に捧げます」と早や大尉の役に就きし如く勇立ち面の赧るゝをも知ざるは多年出世の道を求めて

戰き職に辛抱せし壯年の身に取りて無理も無き所ならんか、楢尾は猶も諂ひて「イヤ自分の勤める用向を聞ぬ中に爾う惑び給ふな生優しい仕事では幾干寒武の心が廣くても人を陸軍大尉に登しはせぬから　立「用向は何の樣でも厭ひません　立「其決心なら結構だ、拙者も安心して言て聞すが、此頃國王と寒武とを怨む者等が諸國に潜伏して佛國を覆へすと云ふ容易ならぬ大望を企てゝ居るじや　立「成る程　立「其大望を今の中に妨げて、起らぬ中に揉潰すと云ふが君の役目で　立「エ、エ　立「イヤ爾驚き給ふな、揉潰すと云ふと大層に聞ゆるが、仕事は君に適當して居る、實は其の謀反人どもの連名帳を初め謀反に就て往復した大事の書類が或る手箱の中へ入り何所へか隱して有ると云ふのだ　立「成る程　立「夫で其隱し場所と云ふは賊の先鋒何某の妻で今年廿歳か廿一歳位の或美人が知て居る、君は其美人に近き美人の心を弱して其手箱の隱し場所を聞出さねば成らぬ」立夫の顏は

又少し晨り來り「ですが其美人に何うして近きます　曾夫はナニ抽者が其美人の所夫へ宛て充分の紹介狀を書て遣る　立「所天と云ふのが賊の先鋒ですッ　曾「爾々、其紹介狀は抽者の閲筆で認めるけれど此企ての後抑を仕て居る和蘭國主の親筆と同じ事、誰の目にも決して見破られる恐れは無いから君は阿蘭國主の腹臣と云ふ積で賊の先鋒に取入り最も巧に猫を冠つて一方には先鋒の親任を得て先鋒が何月幾日に何所の間道を通り巴里へ忍び込むと云ふ事を見出し給へ、其間道も大抵は分つて居て政府でも既に伏兵を設けて有るけれど賊も中々の去者も之何う又其道順を變ぬとも云はれぬ爾して一方には又其女房なる美人の心を翫かして今云ふ手箱を盗み出すのだ」事甚だ難けれども自が身の出世には如何なる困難をも凌がんと決心せる立夫なれば僅の間考へし末宜しい遣ませう」と答へたり　曾「好し〳〵、爾して愈々君が其箱を偷み出せば君が今まで主人とした織部夫人

も連類中の重なる一人だから、第一に夫人は斬罪に處せられるのだよ是は今から君が承知して居ねば成らぬ」と最も苦き一節を一番終りに持出すは是も楢尾の秘術ならんが、慾に目の無き立夫なれど是には少し驚きし如く返す言葉も頓には出ず苦々しき顔附にて暫し考へ込みし末「夫あら爾と初めに言て下されば好のに」と獨語の如く打呟く　曾「ナニ全体云へば是だけは隱して置く所だけれど、愈々仕事に取掛つた上で之を聞出し俄に君の心が鈍ては困るから夫で斯う知せて置くのだ、成る程君の爲には永年寵愛された大恩の有る夫人だらう、けれども今は國家の賊だ國家の爲に私しの恩を捨て情を捨るは忠義の本分と云ふ者だ」と、柄に無き忠義沙汰は立夫の耳に入易からず、出世の爲は爲なれど夫人ありて生き夫人ありて育ちたる今までの情を思ひ、且は此後再び夫人が世に出る事あらんを思へば慾徳の上に掛でも輕重し難き場合なり、楢尾は夫と見て又冷笑ひ「猶だ夫人の事を思

ふとは君も餘ぼどお目出度い男だよ、君は夫人が町盡れの或宿屋に潜んで居る事を聞かぬか、アノ宿屋には夫人の情夫が隠れて居るのだよ、情夫が怪我を仕た者だから夫人は君を振捨て其許へ逃て行き傍を離れず介抱して居る夫を君が思はずに遠慮するとは間抜にも程が有るセ」湖情の男にでも之を聞きては心の中穏かならず顔に腹立しき色を浮べて情夫とは誰の事です　蛇今云ふ賊の先鋒サ、丁度君と同じ年頃の好男子で伯爵有藻守雄と云ふのだ守雄の顔は知されど守雄と夫人と屢々手紙の遣取し殊に夫人が其手紙を秘密にせる事は衆て勘附居る所なれば今は此言葉を疑はず「已れと云ふ一念を現せば楢尾は茲ぞと見て取りて「守雄が君の恩人を盗んだから君も亦守雄の妻を偷むのが當然の意地では無いか」此一言は忠義の説より猶ほ効目著るし、楢尾は効目に附込みて「夫に其妻を偷むが爲め陸軍大臣に出世して其上三十万ッフルの賞金に與るし、否と云へば今まで僕の口から國家の秘密を聞たのだから君は寢武から不安心の人間と認められ生涯大牢獄へ投込れて出る事の出來ぬ人と爲る位が落だよ、サア何方でも君の勝手に撰び給へ」と退引ならぬ十々滅を刺すに彼れ何ぞ否を云はん「宜しい充分に此役目を仕果せます」と充分に決心して引受けたり

第十三回

斯く楢尾明が鳥居立夫を雇入れてより今は早や六週間を經たり其間彼等は何事を爲し居たるや其の消息知る由なければ茲には怪我人有藻守雄が事より記さん、守雄は四五日の程は日に〳〵見廻り來る醫師の目にも死生の見込附兼る程なりしが唯だ愛深き妻妬陀の介抱は藥千帖にも優りしと見え一週間目より少しく快復の緒口立ち夫よりは醫師も驚く程速かに癒行きて三週間の後には或上等の宿屋に移り醫師の許を得て日頃懇意なる

人々にも面會し氣に向きたる雜話を喜ぶ程と爲れり病氣中に見舞來しは孰れも秘密の友人にして彼の織部貫夫人も其中なりしも貫夫人は此地に永居するを好まねば身を通常の婦人に變し妙陀の下部祖平に送られて私に佛國へ歸しとなん妙陀は我命に替ても殆んど必死の想にて介抱の勤めを果し守雄が日に〳〵快なるを見るに連れ此後の事種々氣に掛れど勿論守雄を愛するのみにて別に織部夫人の如く政治上の意見とては舞き女なれば守雄の負傷は悲めども之が爲に彼の恐る可き大望の止りしは結句心安き事に思ひ、一日も早く守雄を元の身体にして手を引合て古郷へ歸らんと夫のみを樂む樣子なれば守雄も時々は眉を顰むる事あれど何にも知らぬ女の身にて斯までも我を慕ひ我が爲に此の三四年來男姿を變とせず旅より旅に果しも無き艱難を忍ぶのみか溜息一つ發せざる其心中を思ひ遣りては人知れず斷腸の涙を呑むも多し、唯幸ひに此頃諸國遍歷の末と

云ひて或有力なる同類の手紙を持ち來りて我が仲間に入りたる帶里谷大尉(原名オーピョア)と云へるは美しき笑顔の中に万夫も當り難き程の勇氣を蓄へ共に軍の掛引を論ずれば口角に風を生じ獨り危難の地に立しむるも一廉の役に立つ如く思はるゝにぞ守雄は事に托し幾度か帶里谷の氣を引見るに、少しも疑ふ可き所なく、萬一の過ちにて我身に不幸の事あるとも此人ならば我に代りて部下の決死隊を率ゆるの技倆ありと見込しより餘程の秘密も打明て語らふに妙陀も所天の大切なる友と思へば此の人を疎略にせず殊には此人の來る度び所天の顏色晴れ渡りて最と心好げに見受らるゝ故、此人こそは天より我所天の全快を早からしむる爲め送りたる使者なるかと思ふ程に打喜び、歸りには次に來る日を問ふまでの親密なる間柄となりぬ、殊に又帶里谷大尉は諸國を經歷りしと云ふ丈ありて孰れの土地の事にも詳しく此程までは佛國に留まり居しと稱して巴里の事情な

どは最も能く暗じ、路易や蹇武の驕敖なる振舞を說けば守雄に齒切をせしむる程實に切り、一轉して芝居其他の事に移れば妃陀も我身の憂を忘れ幾月の間笑たる事なき其の眉を開くに至る實に此人は男女に向ひ一種の魔力を備へ居るかと怪まるゝ程なりしが、夫や是やの力にて守雄は六週間目の日には馬に乘るとも苦からずと醫師より言渡さるゝに至りしかば或朝天氣の好きに乘じ妃陀の手を引きて散歩に出てアルッセル府の名所など其所此所と見廻りて終には町の廓外なる小山の邊まで至り生茂る林を穿ち、木々の間を洩れ來る日の光に身を洒し小鳥の囀るを聞きながら、殆んど浮世を忘れし如く恍惚として徘徊するにぞ妃陀も最早や守雄が全く政治上の事を忘れ、安樂の人と成りしと見て和めて人間に歸りたる心持し、時に路傍の草を摘などして「チ、貴方、此樣な樂しい世界も有ますのに是を捨て世間を怨み復讐だの軍だのと其樣な恐ろしい事にばかり掛つて居るは勿

体ないと思ひますよ最うアノ手箱も燒捨て仕舞ふでは有ませんか」と云ふに守雄はピクッと驚きしも纔かに顏の色を整へ「苦むのも樂しむのも人々の生れ附だから仕方が無い和女が夫ほど旅の苦勞に飽たなら、今に頑平が歸るから彼れを附けて先へ故鄕へ歸して遣ふ爾サ手箱も人手に渡すより、は燒捨た方が安心かも知れぬ」と云ひ更に又口の中にて「アヽ可哀相あは唯だ妃陀だ」と呟くに妃陀は忽ち眼許を潤ませ「先へ獨りで歸る樣なら今まで旅は致しません、私しは又貴方がアノ事は最う忘れ成さつたかと思ひまして　守「堪忍して呉れ妃陀、一旦の怨みは、晴すまで能う忘れぬが已の不運だ夫が爲に和女にまで此通り苦勞を掛る　妃「アレ又其樣な事を仰有る、苦勞は初からの覺悟ゆゑ、貴方が此事を忘れぬと仰有れば私しは何にも申しません何所までも御一所に行きますが――夫では今日の此散歩も　守「オヽサ、人里離れた此森の盡れで巴里からの密使に逢ふ筈だ」決然たる一言に妃

陀は忽ち涙を収め、再び守雄の心を鈍らせまじと強て顔色まで引立れど、少し以前の晴渡りし相には復らず　守「妙陀悲しいか　妙「イヽエ」答へながらも傍向けんとする其顔を守雄は引寄せ前額に熱き接吻を私し「最う當分は落々と話する暇も有るまい」云ふ言葉の終らぬうち一方の茂りを掻分け「大層遅いじや無いか」とて立現はるゝは是なん帶里谷大尉の美くしき顔にぞある

第十四回

帶里谷大尉の現るゝを見て守雄は喜色面に溢れ「オヽ人の注意を引くまいと思ひ所々寄道をして來たから大層手間が取れた、シタが一同の者は」帶里谷は頓に返事せず先づ妙陀に向ひて「イヤ奥方、此樣な所から不意に飛出てお驚かせ申したのは誠に濟ませんが」とて慇懃なる挨拶を初めんとするに

ぞ守雄はもどかし氣に「エ、大尉、一同の者は何うしたか」帶里谷は偖儀なく妙陀より此方に向き「夫は最う云ふ迄も無く巴里よりの密使次第で直にも出發する手筈を定め向ふの村で勢揃へを仕て居るから大丈夫だ、君の馬丁有井（原名アリー）も今にも馬に鞍を置き其邊へ見えるだらう、僕は最う先刻より定めの場所に待て居たが餘りに君が遅いから茲までブラ〳〵見に來たのだサア來たまへ、奥方も入ッしやい」と先に立て案内しつ、是より半町ほども行けば雑木の取囲みたる中に廣さ十疊敷ほどの芝生あり之が兼て定めたる會合の場所なる可し、妙陀は唯だ此後を氣遣ひながらも所天と並びて木の株に腰を掛るに帶里谷大尉は妙陀の正面へ斜に身を置き足を芝生の横手に投出し美しき顔の半面を妙陀の眺むるに任せ置き、己れは待遠しゆに遙か彼方の空を望みながら、此頃秘密黨の間に行はるゝ寓意ある軍歌を低き聲にて謡ひ初むるに其音亮々として微妙なる樂器より出るかと疑

はれ忽ちにして風の梢を渡るが如く忽ちにして水の谷合に咽ぶに似たり、若し巴里の美人社會をして斯る歌を聞しめば誰一人神蕩け氣動ぬは無き程ならん、妮陀も思はず聞惚れて彼れの姿を眺むるに、彼れ日頃最華美かなる紳士の私服を纏へるに似ず、今日は勇しき軍人の扮打にして日頃とは又見違て趣きに富み、殊には其の輕き帽子を締も無く頭の背後に跳退けて其縁より現はる〻髪の毛は黄金の如き艶ありて短けれども房と爲り、何氣無く額に當たる手の優かなる時々朱き唇の間より現る〻齒の麗しき、實に是れ天界の人ならずば、繪に畫ける貴公子の玆に拔出て來りしかと疑はる〻ばかりなり、妮陀若し心に掛る事なくば此の美しさに魂を奪はれ我を忘るゝに至るやも知り難けれど樣々の事氣に掛りて、見るものも目に寫らぬ程の折なれば帶里谷大尉を眺めながらも其美しさ心には留らぬに似たり、守雄も唯だ大尉と同じく向ふの方を眺むるのみなりしが彼れ第一に膝を打

ちて「ア、來た〳〵」と立上る、妮陀も之に驚きて彼方を見れば兼て知る守雄の部下にて波蘭土の人幸助原名コフスキー)と云へるもの、旅人の服にて彼方より馳來り、見るうちに早くも一同の前に立ち軍人風に立禮したり、守雄は笑しげに「オ、幸助定めし道中が難儀で有たゝらう、何うだ巴里の樣子は今日は貴樣が歸ると云ふ兼て定めの日限だから事に由れば歸らうかと一同で待て居た、サア巴里の樣子は何うだ早く云へ」幸助は何故にや返事するを憚りて唯だ發はしげに帶里谷大尉の顏を眺むるのみなれば守雄は夫と察して「オ、貴樣は猶帶里谷大尉を知ぬのだナ、兼てより我黨の爲に働く士官で此度の先鋒に加つた、此方には少しも遠慮は無い已に知せる事柄は此方へも一樣に知らせて好いのだ」幸助は止むを得ずと云ふ風にて「では申ますが、今から直に出立せば上首尾です」と云掛けつ再び大尉の顏を眺め口籠る樣子なれば大尉も夫と氣附てか「オ、流石に有藻君だ、斯まで能く部下を

仕込だ者だ、初て見る僕の顔を疑ふとは實に斯無くては成らぬ筈、僕が有藻君にしても是位大事を取る士卒で無くては決して秘密の使者には使はぬ、好し〳〵僕は談話の濟むまで此所を退かふ、ナンダヲ、有藻君僕が是くらゐの事で氣色を損ずると思ひ給ふか」と云ひ未練も無く立上り、守雄の引留るも聞ずして其儘孰れへか去らんとして「だが、一刻も早く此樣な忠勇の士に近附に成らぬと云ふは殘念だ立去る前に握手だけ仕て置かふ、ヲ幸助殿」と云ひ早や幸助の手を取りて握りメる其振舞の率直にして愛らしきは何とも云へぬ程なれば、唯此一握にて彼れの魔力は既に幸助を醉はせたり、握り終りてスタ〳〵と立去るにぞ守雄は斯も心の開けたる一武人に隔を示すは作法に非ずと思ひし如く「コレ〳〵大尉、大尉」と呼留め、急しく妬陀に目配するに妬陀は直ちに其意を悟り、自ら立ちて走り寄り、去らんとする大尉の腕に背後より手を掛けて引留るゑ大尉も之には逆ひ得ず、妬陀の其手に又

手を掛けつゝ引かるゝ儘に、元の塲所へと歸りしが、妬陀の手、大尉の手と觸れしは是が初てなる可し斯くて到底帶里谷大尉は守雄と共に幸助の密旨を聞く事とはなりぬ

第十五回

疑ひ深き幸助も今は全く安心し其密旨を述る樣愈〻時が參りました、國王路易はヴァセーユの宮城よりゼルメーンの離宮へ移り其道で我黨の待伏塲所と定めて有る彼のマルレー村の旅店の前を通ります是は最う久しく以前から定つた事柄で既に其準備中もゐ少しも間違ひは有ません我〻同士其の刻限までにマルレー村の宿に着き、待伏てさへ居れば王を捕へるのも殺すのも手の裡です、殊に當日は護衛の兵が極少く其中に我黨の勇士たる梅員女の所天が加つて居ますから」と事細に述るを聞き守雄は殊の外滿

足の体にて能く分つた、シタが其の日限は　幸「ハイ四月の一日です」守雄は指を折數へて「今日が三月の廿四日、今から直に出立せば猶ほ八日の猶豫が有る、弛々と旅行が出來るな」帶里谷大尉は傍より「爾とも纔か三日あればマルレイ村まで行かれるから」と合槌打つに幸助は又聲を潜め「所が寒武の手が中々能く廻つて居ますから無論大道を行く事は出來ませぬ間道中の間道を通りますゆゑ先づ六日い掛ると思はねば成ませぬ　守「守めし失念なく其間道も見定めて來たで有ふナ　幸「無論です間道を見定める爲め今日まで掛たのです　守「シタが何所の道を最も便利と見定めたが　幸「爾ればです最初の困難はオーニル河です、向岸にクスノイの鎭臺が有て見張が隨分嚴重ゆゑ是は兼て定めた通りセポルグ村の上手へ出で彼の氷車の有る家へ行くのです、水車の主人は既に私しが打合せを濟せて來ました鎭臺の夜番兵が通り過れば直に松明を門へ出すと云ふのですから我々は其光り

を目當に進むのです　守「夫から　幸「夫から水車に一泊し折を見て翌日か翌夜かに河を渡れば少しも氣遣ひは有ませんが第二の難所はソヂンの谷川です、是も向の岸にペローンの塞が有て見張が最も嚴重なるのみか茲には不幸より我黨に心を寄る者が有ませんから上手の最も深い所を渡らねば成ませぬ、土地の者等が魔が淵と字する所ですが茲ならば迎も渡る事は出來ないと向ふにも見張を附ずに有ますから」と事細かに說明す其言葉の終らぬうち雜木の背後より微なる人聲の聞もるにぞ一同は打驚きて耳を澄すに全く聞慣ぬ聲にして何やら歌を謠ふに似たれば　守「何だ　帶「何だらう」と互に問ふ幸助は打笑ひ「アヽ語らぬ事に驚きました、アレは里の童の艸刈歌で、阿蘭陀の言葉です故夫で皆樣の御存が無いのです」と說明すうち年の故十二三なる田舍娘肩に艸刈籠を掛け雜木の間より現はれて彼方へと立去れば帶里谷は第一に安心し「幾等寒武でもアノ樣な小女を探偵に

は遣ふまい　守「爾は思つても寝武の探偵は種々様々の風を仕て到る所に徘徊して居るから何時又何の様な奴が現れるかも知れぬ少しでも探偵らしい挙動が見れば直に其場で射殺て仕舞ねば」と守雄は早や戰場に臨み し氣にて最と恐しき言葉を吐くに帶里谷も小聲にて「射殺す丈では腹が癒えぬ、嬲殺しに仕て呉れねば」と云ふ、妬陀は傍より「ダッテ貴方、今の艸刈が探偵と云ふ譯では有ますまいに」と注意するに守雄は「夫は爾サ」と云ひ再び幸助に、打向ひ「夫で何も彼も分つたが、若しや巴里で奴頑平には逢はなんだか　幸「エ、頑平が巴里へ行ましたか　守「貴夫人を送つて行て最う五週間にも成るが何の便も無い奥逆に捕縛されも仕舞ひのに」幸助も暫し考へ「アヽ分つた彼れも必ず、其所此所の間道でも捜めて居ませう　守「孰れにしても今日一同と共に歸らぬは甚だ心許ない、併し彼れの爲に出發を延すと云ふ譯にも行かぬ爾だ彼れ或い巴里で我々に逢ふ積で待受て居るかも知れぬ四月

一日にゝ必ず彼のマルレイの旅宿へ來るだらう斯云ひて立上れば妬陀も亦續て立しが早や八日の先へ生涯の大事が推寄しかと思へば孰れも心は安からず、帶里谷は馬繋ある木の方に去り幸助は「待兼て居る一同の同士へ逢て來ますから」と云ひ一散に走り去りぬ妬陀は元の如く守雄と並びて歩みながらも虫が知すと云ふ者か何とやら胸騒ぎし心配に堪へざるにぞ、涙に潤む目を擧げて「貴方」守雄は何もより稍荒き返事「何だ　妬「爾すると何日お立に成ますか　守「今日直に　妬「貴方は此樣な大望が成就すると思ひますか　守「又愚痴を云ふ　妬「イヱ愚痴では有りません頑平も未だ歸らず私しは何とやら氣に掛る事ばかりで　守「夫ほど氣に掛るなら先刻も云ふ通り先へ歸つて待つが好い、全体此樣な危い仕事へ女を連るのが間違て居る、和女の爲に心が鈍つたと云はれては守雄の名折だ」妬陀の眼に滋にし涙は今は點々其頬に傳はり流る　守「歸つて凱旋を待つ方が双方の爲かも知れ

ぬ爾すれば手箱も却て安全だし、ト云て頑平が歸らぬから和女を送る者も無いが、イヤ有る〳〵、別當有井に送らせて遣らう和女の胴着には一身代と云はれる程の夜光珠も縫込で有り夫だけでも生涯困る事は無く其上銀行頭取番倶露英に預さ金も毎でも引出す事が出來る」姆陀は漸く涙を呑み「最う何にも申しませぬ、貴方と分れて何うして獨り歸られませう、何所までも御一緒に　守」では初の約束通り何にも云はずに隨てお出オ爾云ふ内に丁度有井が兩人の乘馬を連て來さ」と云ひ彼方より二頭の馬を引來る男を手招き、一頭へ姆陀を載せ其身は殘る一頭へヒラリと乘しが、遥か背後の木の影より此樣を伺ひ居る帶里谷大尉は先ほどの艸刈女を呼寄せて「サア之を直に稻尾の所へ持て行け」と云ひ手帳を裂きたる紙の端へ「ソンメの谷川魔が淵」と認めて渡したれど知る者絶えて無かりしとなん

第十六回

茲に又織部貴夫人は奴頑平に送られて漸く巴里へ歸り着き、其住居とするソイソン邸に入たれど今日の姿は昔日の姿に非ず、昔思へば國王の未婚の妻として飛鳥をも落す程の勢ひありて日々御機嫌伺ひにと尋ね來る者幾人と云ふ數を知らざりしも其時とは打て代り廣き屋敷の門前も殆んど雀の羅を張るばかりにて馬車を通はす表門は鎖せし儘其錠の錆るに任せ、大勢の下女下男とても用事なければ自づから靜まり返り家中宛ながら喪に服せしかと疑はる、夫人は斯く物淋しき中に在りて何一つ心を慰むる者も無ければ邸内に在る高塔の一室に逃籠り時々に窓を開てき空行く雲を見る外は我身の墓なきを嘆くのみ國王に捨られてより幾年月我れと我心を苦むる怨みの念も唯だ立夫を愛し初めし爲め少しは紛るゝ事も有り寧そ此世の榮華を忘れ立夫と共に人知らぬ深山の奥に隱れんかなど時には氣の

替る事も有る程となり居たるに今は其の立夫にまで捨られしとは之に增す恨みやある思ひ來れば恩も知らず義理も知らぬ立夫の憎さ國王にも優るほどなれば歸來てより一週間が程は只管ら彼れが薄情を怨むのみなりしも淋しさの日に募るに連れ怨みは又も初めの愛に歸り斯る時立夫が我が傍に居たらんには如何ほどか淋さの輕からんに、彼れを楢尾の家に殘し我身唯一人逃出せしは彼よりも我身の不實なり彼れ幾日か我行衛を尋ねしも終に尋ね得ずして絶望し用にでも身を投はせざりしか或は又我身より今にも迎ひの來ると思ひ心待に待居たるを絶て其事の無かりしより最早や我身に捨られし者と思ひ腹立紛れに孰れへか立去りしには有らぬか、イヤ〳〵夫ほどならば此屋敷まで尋ね來る筈なるに夫もせざるは若しや又婆武の手先に捕へられ我身の事を攻問はるゝも彼れ今までの恩を思ひ何事も口外せず夫が爲に大牢獄パスチルへでも投込れしには有らぬか、爾な

り、爾なり、大牢獄へ入られしに非ずは何とて一片の便りもせぬ筈や有んと果は悉く彼れの不實を許し、私に人を屆ひてアルッセルまで探しにも遣れど彼れ楢尾の屋敷より孰れへ行たるや皆無形無に消失たりとの知せを得たれば夫人は愈々我が推量の當りしを悲しみ彼を愛するの念日頃に百倍に增し來り夜晝の差別無く物狂はしき程となり、今は切てもの思遣りに彼れの持居たる道具類を我居間に集め來り撫でつ眺めつ愛玩し織かに心を慰むるは憐と云ふも中々なり、今日も夫人は朝の程より立夫の事を思ひ暮して夕方までも欝ぎ居たるに室の戸を輕く開きて入來る一人の女あり身には黑き長外套を纏ひ徐々と夫人の横手に出で「又お考へで御座います か」と、云ふ夫人い偶の音連に打喜ぶ如く振向て「オヽ梅眞女、今は最う和女の外に誰も尋ね來る人は無い能く來て呉れた、色々と相談したい事も有る」と 横手の椅子を指示せば梅眞は徐に外套を脱棄る、下に纏ふい上等の絹服

にて誰の前にも恥しからぬ身拵へ且は其顔附とても先づ十人並優れし方にて年は二十六七歳なる可く、技倆より猶ほ何所と無く智慧有り氣なる樣子見ゆ、抑も此の梅眞女と云へるは先に白猫臺に殺されたる蓮女と同じく伊國の生れにして幼き頃より夫人の傍に仕へしが廿歳に及びて國王路易の馬役を勤むる安東(原名アントイン)なる者と思ひ思はれ夫人より暇取りて婚禮せしが當時い世間一般に種々の呪詛などを信じ朝廷を初として堂々たる政治家までも鬼宣或は神托などを眞事と思ひ巫女占者など云へる者一般に持囃さるゝ時代にして梅眞女は生附き智慧敏く人の相を見、人の心を見拔くに妙を得たれば心迷へる貴夫人達には殆んで巫女の如くに敬まはれ孰れの家へも招かれ行き秘密の占ひを頼まるゝに從ひて樣々の事柄を耳に挾み當時上等社會の秘密にして殆ど梅眞女の知らぬは無く梅眞女の舌一枚にて朝廷の權臣に赤面させるも最易き程と爲りたれば何時の

頃よりか痛く寢武に惚まれて所天の役目さへ危き事屢々なるより果は所天と共に秘密黨に加はりて人知れず力を盡せり、殊に此兩三年は毒藥學の開山と稱せられし伊國人エキジリを初とし其他の學者に交はりて深く毒藥の眞理を究めたりなど云へる風評も有り夫か有ぬか梅眞女の家は庭木までも伊太利其他の遠國より取寄せて植たる者にて巴里人の見し事も無き類ひなれば是れ皆恐る可き毒樹ならんと云ひ、流石の寢武までも容易に此女よは手を下し得ぬ程の勢ひなしと云ひ後に毒藥使用者の詮議嚴くなり此女第一に法廷の尋問を受け、東洋に有りしと聞く釜煑の刑と一對の慘刑に稱せらるゝ硫黄火燒殺しの刑に宣告せられ二百年の後までもラ、パイシーンの恐ろしき名を殘せしは實に此女なり

第十七回

梅眞女は織部夫人の前に坐しつゝ、右に取散しある彼の鳥居立夫の道具類に目を注ぎて「貴女はお心が變りましたぞ」と靜に言て、夫人の返事如何を待つに夫人は合點の行かぬ如く「心が變つたとは何の事」梅「イヤサ、今ではは路易王より立夫を大事とお思ひ成るのですぞ」夫人ハ更に驚かず「今更云ハれる迄も無い、路易は唯だ憎いばかり、何うして彼れを立夫の樣に愛せられやう　梅「でも有ませうが立夫ハ最う貴女の手にハ歸りませんよ」夫人ハ初て色を替へ「何と云ふ立夫が私しの手に歸らぬとハ、矢張り彼れハ大牢獄へ入られて居るだらうか　梅「ナニ爾でハ有ませんが今ハ最う敵の者です、追ては大牢獄へも入られませうが　夫「和女に夫が何うして分る、コレ何うして　梅「何うも仕ません見拔ました、私しの見拔た事に今まで間違が有ますか貴方が先にお立の時も此旅行は危いと誰が申ました　夫「和女が、和女が梅「ですから今も私しの云ふ事に間違ひは有ません、立夫は敵の者と爲り極

極危い道を歩んで居ます、劒の刃を渡る樣に一歩違へば彼れの命が有ませんぬ」夫人は少しも疑はず「何うかして彼れを救ふ道は有るまいか私しは最う彼の爲なら命も入らぬ財産も入らぬ、何うか梅眞和女の智慧で　梅「では最う立夫の爲には國王路易も入ませんか」夫人は宛も胸に釘でも打れし如くギクッとして返事も口に閂へしが頓て又「路易を憎いと思へばこそ危い旅行も仕たでは無いか、斯まで世間に捨られて一月でも二月でも私しが茲に潛れて居れば誰一人尋ねて來ず朝廷に儀式が有ても織部ばかりは迎へられぬ、國王初一同が最う織部夫人と云ふ名前を忘れて仕舞たかと思へば路易も憎い、饗武も憎い、朝廷一同皆憎い、憎ければこそ雷鼠拉や有藻守雄に心を寄せ、彼等が此朝廷を覆へすを待つばかり其間ゑも傍に居て心を慰める立夫が無ければ何うして此永い月日が送られやう、榮華と云ふは名ばかりで、島國へ流されたも同然の今日此頃、物言代す相手も無ければ機嫌伺ひに

と來る人も無し、コレ梅眞、私しの心を察して、お呉れ、立夫を救ふて私しの傍へ復してお呉れ、和女の智慧で其工夫の出來ぬと云ふ事は有るまい」と恨に狂ひ愛に狂ふ夫人の心を察しては梅眞も無理とは思はず「イエ、夫人今にも何かアルセル府から便りが有て立夫の事も分りませう夫までは何の工夫も附ませぬ、唯だ待て居るばかりです　夫「待て居るとは何時まで待つ、今までも辛抱の盡る程待たのに　夫「でも貴方便りが無いのに何う工風が附ませう」と言掛て又聲を潜め「ですがネ、夫人何うも此度の事柄も旨く行き相には思はれません、有藻守雄が居酒屋で窟武の廻し者に傷けられ大事の合圖が食違つた時からして、味方の内にも氣抜がして敵に心を寄せる者が多分に出來たかと思はれます、ナニ那の守雄の熱心は却て前より増す程でも、先鋒の後から直に續て來る同勢が無ければ可惜ら守雄に打死させる樣なもの、何うも私しは同勢の氣折を氣遣ひます」と女ながらも大局の利害を說く其言ふ所は軍師の言葉に異ならず　夫「でも何故に其樣な氣の弱い事を云ふ　梅「イエ、守雄が怪我を仕て以來餘り同勢が靜過ます、先鋒が巴里に入れは續いて旗を揚ると云ふ各地の同勢が最う此事は敗れた者と斷念して居ないかと疑はれます、夫にネ路易の護衛と定つて居た所天安東も退けられました　夫「何だ和女の所天安東が朝廷から退けられ　梅「ハイ　夫「夫では誰か――　梅「ハイ誰か味方の中で朝廷へ内應する者が有て安東には氣が許されぬと云た者と思はれます、是などを考へても若や立夫が楢尾めに雇入られ誰か味方の有力な者へ附て秘密を通信するのでい有るまいかと私しい斯う思ひます」夫人は椅子より跳起て、穩かならず室中を歩みながら「其樣な事は無い、アイ其樣な事は無い、和女の推量に間違ひも有るまいとは思ふけれど立夫が私しの敵になり朝廷へ内通するなどとい　梅「イヤサ夫が有るから彼の身を危いと云ふのです　夫「若し爾ならば私しは彼れを

救ふて遣る、私しの傍にさへ置けば決して敵へ心は寄せぬ」と早や梅眞女の言葉をば眞正の事實の如く思込みて氣を揉むも平生梅眞女の信用の厚きを知る可し　梅「貴女の御氣質では何と了しても立夫をお見捨には成りませんが、孰れでも實地に便りが有る迄は何うしても致し方が有りません」と云ふ言葉の終らぬうち、入口の襖を開き燈火を持來る一人の侍女、織部夫人に打向ひ「唯今貴女樣へ御面會を願ひ度いと云ふ武士風の方が參つて居ます」夫人は唯だ一言に「其樣な者に用は無い歸してお呉れ　玄「私しも爾思ひ御面會は出來まいと了ましたが仲々聞入ませんプルセル府から蜜夜馬に乘通しに驅て來たとか云ふ事で可愛相に馬も汗水に成り今にも倒れるかと思ふ程です」プルセル府よりの急使とは扨は味方の注進でも有るにやと夫人が眉を顰むれば梅眞女は傍より「お逢ひ成されば樣子が分ります、立夫の事も必ず此使ひが知て居ませう　夫「ア、爾だ直に是へ通して呉れ」

侍女は畏みて退きしが知らず此の急使何人なるや

第十八回

プルセル府よりの急使とは抑も何人にや夫人は心配の胸を撫でつゝ「誰だらう、エ梅眞　梅「私しにも分りませんが　夫「でも今にプルセルから便りが有ると和女ゝ見拔て居たじや無いか　梅「見拔ずとも最う誰からか便りの有る時分ですから爾申したのです、今に茲へ來ませうから分ります、夫よりも先づ茲等をお片附成さらねば」と云ひ梅眞は取散しある立夫の道具など片附け猶ほ窓の戸を閉ぢなどして今しも侍女の持來りし燭臺を室の中程に押出し其身ゝ面會の邪魔に成らぬ樣、隅の方へと退きしに此時前の侍女ゝ急使と云へるを連れ來り「此方です」と引合せて退きたり蠟燭の弱き明りに顔は定に分らねど姿最と嚴丈なる一武人、恐る〳〵歩み寄り無言の儘に

首を垂るれど今まで見し事なき人に似たれば夫人は此方より言葉を促し「アルセル府から來たと云ふは貴方ですか、何の樣な知せ事です」急使は破鍋の如き聲にて「貴方樣には私しをお見忘れに成りましたか」聞し樣な聲なれど猶ほ思ひ出さねば傍の燭臺を取り容赦も無く、其顏に差附けしが夫人の魂消て一足引き「貴方の、貴方の　使「ア、有難い猶ほお忘れにい成ませぬな」夫人は又一聲高く「楢尾の二階で私しを引留めた無禮な顏を何うして急に忘れませう、貴方の楢尾の友達で私しの寐室の出口を番して居ました、今も又彼れの命で織部を欺しに來たのですか」と叱り付るも無理ならず彼れの全く夫人を連と間違へたる彼の男爵相須根なり、腰に着けたる太刀の曾て守雄を傷めたる恐しき不爛白刃なりと知らる、相須根の此叱りに少しも怯まず「私しが眞に楢尾の友達で貴女を欺しに來る程ならアノ時貴方を逃しは仕ません」夫「アノ時は侍女達と間違へたのです、織部と知れば直ぐ捕へ

る所でした逃して呉れたは貴方の落度少しも恩では有ません」相須根は殆んど恨しげなる口調にて「何で恩にお着せ申ませう、コレ夫人、此相須根はアノ時から身も魂も貴方の奴隷、貴方樣の柔かなる唇は六尺の丈夫を蕩かしましたし」夫人は猶ほ言葉の意を解せず「貴方が何と仰有つても楢尾は最う私しの友達で有ません彼れは窶武の手先です、其手先の許から來た貴方の言葉は聞くに及びません」荒々しく言退けて戸の口を指し示すは面會も是までもお出で行けとの心なる可し、相須根は猶ほにじり寄り「貴女の唯一度のお情に心も紊れ役目とても手に附ければ楢尾からは疑はれて內々敵に心を寄せる油斷の成らぬ男だと上申せられ今は窶武から睨まれる身と成ました、有藻守雄を傷けた手拭までも反て言附に負いたと落度の一つに數へられ、今は最う有藻守雄の連類と同じく國の賊です、貴女に身を寄せ犬馬同樣に使はれる外は有ません、憎い奴だと今まではお怨みでも是からは手下

の一人とお召使ひ下さらば不束な不爛白刃は誰彼れの容赦なく貴女の敵の首を刎ます、モシ夫人、一度の接吻に命までも投出した大の男を哀れとは思ひませぬか」と夫人の裳に手を掛る、アヽ彼れ威名一世に恐れらるゝ身を以て今は愛情の奴隷と爲り命を夫人に捧げんとするか實にや佛國は婦人の國にて婦人の勢力武人に優り古來幾多の英雄も綿の如く心鈍り婦人の顧に使はれて或は醜き最後を遂ゲ或は恐る可き陰謀を企つるなど其例一多きに況てや織部夫人、綺倆は絶世と云ふに非ぬも男子を惱殺するに一種の妖力あり曾ては國王路易むまでも唯だ一顧の秋波にて狂の如く痴の如くならしめたる程と云ひ殊に又男爵相須根は打物取ては天下に敵なき剛の者なれ婦人の愛にとては漏ひたる事も無く、彼の楢尾の眼にも女に掛けては小兒の如しと見拔れし程の身にて圖らずも夫人の桑かなる唇に吸れしかと思へば是を又と無い榮譽として魂迷ひ神動き忽ちに恍惚として心

を翻へすに到りしも無理ならず、是を怪むは夫人を知らず相須根を知ざる者のみ裳を取れて夫人は驚き「エヽ、此人は、エヽ、貴方は織部夫人を誰だと思ひます　須「イエ〳〵、無禮では有ません、相須根の命の持主だと思ひます唯だ貴女に使はれて居さへすれば相須根は夫だけで生涯の願ひは足ります死でも恨は有ません、コレ夫人、迷ふた男と見許して是から手下の一人に加へて遣ると唯一言仰有つて下さらば相須根は貴女の犬です奴隷です貴女の大事を聞込で、何うかお助け申度いと思ふばかりで百里餘りを馳て來た相須根を猶だお疑ひに成ますか」夫人は又も腹立しげに其裳を振拂ひ殆んど彼が面に唾せんとする劇幕なるに、此時室の隅に聲ありて「相須根男爵は今から我黨の一人です、夫人の手下に加へられる試驗と思ひ命を的に働いてお目に掛ねば成ません」と云ひつゝ此所に歩み出るは、先程より隅に控へし彼の梅眞女なり

第十九回

夫人の外には誰も居まじと思ひたる室の隅より梅眞女の出來りしには男爵相須根も痛く驚きたる体なれど梅眞女は之に搏はず夫人の耳に口を寄せて言葉世話しく細語くは相須根の心を見拔きて居早や此人を疑ふに及ばじとの次第なる可し、他人の言葉には容易に從はぬ夫人なれど唯だ梅眞の言ふ所は今まで一度も間違たる事なくして恐しきほど能く中れば之には夫人も負き得ず、暫しの中に其心を推鎖めて相須根に打向ひ「では聞ませう私し共の大事を聞込だとは何事です」初めて柔しき言葉を聞き相須根は宛も主人の手より食を得る犬の如く、若しも尾あらば如何ほどか掉るまらんと思はるゝ程の嬉しさを面に現し「ハイ外でも有ません、楢尾の方では貴方がた一同の連名が或る手箱に入て居ると云ふ事を聞出し、其手箱を盗み出しに掛つて居ます」梅眞は傍より「其盗み出す役目は若しや烏居立夫では

有ませんか」屋を指す一言に相須根は驚きて「何うして爾お分りになりましたの」夫人は心配よ堪へぬ如く「アノ立夫が何うして先ア氣でも違ッたと云ふものかい、想イエ是が楢尾の上手な所です、彼れも恐しい口前で烏居立尾を欺かして自分の身方へ引入て仕舞ました、立夫も今では楢尾と寵武の大忠臣です　夫れと又何うして何うしてです　想「初からさねば分りません、貴方が楢尾の別莊を逃出した後で不思議な事が出來ましたアノ侍女の邏じでせう私くしも大抵い推量して居りますが兎に角醫者い卒中に仕てしまいました、此秘密を私しに悟られいせぬかと思ふ爲め一つい夫で楢尾が私しを不安心と思ふのですが、夫は扨置き楢尾は其後で立夫を呼び旨く說附て味方に仕ました」夫人にして若も立夫が我身に不實なりし事を思はば彼れが手易く楢尾に說落されしを推量す、可きも夫人は今や全く彼れの不

實を忘れ唯だ彼れを戀慕ふ一心なれば「夫」ハ合點が行きません、容易に楢尾に說落され私くしの敵になる男では有りませんが　想イエ夫人、全く楢尾が欺したのです彼れは貴方の夜逃を種にして織部夫人ハ有藻守雄に心を寄せ守雄を介抱する爲に立去たと斯云ひました、ですから立夫ハグッと立腹し貴方を不實な方と思ひ　夫「エ、何と仰有る立夫が私しを不實だと　想ハイ爾欺されて恨む所へ、楢尾ハ茲ぞと附入て此仕返しにハ有藻守雄の妻を偷んで遣れと斯云ひました　夫「エ、那の妖陀を　想ハイ何でも其樣な名前でした、夫故立夫ハ守雄を戀の敵と思ひ、其の愛する妻を取れば仇が返せると云ふ積て、名を帶里谷大尉と稱し、及ぶだけの智慧を盡して今は妖陀に取入て居るのです」夫人は聞來りて嘸と又た取逆上せ我にもあらず獨言エ、妖陀は年も若し、綺倆は好し、立夫は最う――妖陀の愛に溺れて居て、妖陀とても立夫を見ては――ッイ心を動かして、アノ妖陀、アノ立夫――」と人に優

れて嫉妬の深き夫人の胸は張裂る程にして我と我身を苦むるは如何ほど辛き事ならん、梅眞は夫人の手を取り「貴方ハ何を仰有ります、妖陀の心を知りませんか、甲弱き女とは云ふものゝ那れは有藻守雄の妻です、初めて逢た仇し男に心を動す事が有ませうか、私しは最うアノ手箱が妖陀の許に在る上は誰と偷む事は出來ぬ者と安心を仕て居ます、況てや妖陀の心を偷まとは手箱を偷むより猶ほ難い事、貴女に夫が分りませんか」と嬉むる如く論されて夫人は漸く我に返り「オヽ梅眞許してお呉れ、私しはッイ色々の心配から、アヽ自分でも氣が違ひいせぬかと思ふ」と少し恥らふ樣子にて再び椅子に身を置きしが、凡ろ心ほど不思議に動く者は無し、梅眞の今の論しに又徐々と横道に流れ入り「オヽ爾だ、心配する事ハ無い、妖陀が心を動す筈も無く夫に又立夫とても此身を愛むて居ればこそ其樣に腹も立て妖陀を偷んで其腹を癒す氣にも成るのだ、今の内に救ふて遣れば立夫の心は、變ぬ〳〵

と無言の中に呟きて更に又相須根に向ひ「今立夫は何所に居ます、直に是から私しが救ひに行きます、彼れの身い梅凡の云ふ通り危い道を渡ッて居きずか　想ハイ宛で劔の刃を渡る樣です、彼れ若し守雄の一類に楢尾の廻し者と見破られたなら直に其場で射殺されます」夫人は心底より胸を貫くかと思はるゝばかりの叫聲を發せしが梅凡は又宥めて「ナニ夫人、決して守雄等に見破られる心配は有まなん、其心配が有る樣なら第一楢尾が使ひません、夫に立夫は今まで朝廷の中に居て守雄の一類には顔を見知れた事も無く且又彼れの氣質を見るに人を欺すには妙を得た生れ附です　決爾で無い、爾で無い　梅イエ兎に角も守雄等には見現される事は有ますまい、唯だ其仕事を首尾能く勤め上た時に蹇武から殺されます、人に秘密を打明て働かせ用事が濟めば此者は秘密を知て居る故生しては置かれぬと云ひ事に托して殺すのが蹇武の今までの仕方ですから」夫人の顔には血の色なし、相

須根は又梅凡の眼力に只驚き「全く御推量の通りです、私しは楢尾の書掛た蹇武への上申書を密と見ました、其中に楢尾の工風を細々と書て有ました夫何と、何と　想皆までは讀まぬ内に楢尾の足音が聞えました也る皆までは讀ませんが、何でも立夫も守雄と共に魔が淵で捕にして、色々問調る事も有り猶又外の同類へ對し彼等の捕に成た事が分ッては返ッて後の同類を激動させる丈の事ゆゑ、後の同類へは守雄等の一行が途中で消て仕舞たかと怪ませる程に其捕縛を秘密にし其場で直に生涯離れぬを被せ雖も知ぬ所へ隱して置くとて其假面の作り方まで說明して有りました

第二十回

鐵の假面を推被せるとは唯だ聞く丈にてゾッとする慘酷の處分なれば鐵

部夫人は身を震はせ「ヱヽ、恐ろしい事をする夫は先ア除まりな、ですが立夫も其假面を被せられる一人でせうか　想「無論の樣です、何でも立夫は爾と知らず假令ひ一同と一緒に捕はれても自分だけは手柄に由り許される事と安心して居ますから縱し外の者は逃れても彼れは猶更ら逃れません」夫人は餘りの驚きに暫しは返す言葉も無し其間に梅眞女は「其樣な手配りが屆いて居れば、迚も一同が無難に巴里へ入込れる事では無い、鳥居立夫は自分で求める罪だから仕方も無いが有藻を初め一同を救はずには置かれません、男爵其の魔が淵とは何所の事です　想「何でもペローヽの横手に在る谷川の上手です、是等の事も總て立夫が聞出して楢尾の許まで注進したのです」梅眞は腹の中にて立夫を憎む事限り無けれど夫人の心を憚りて口には出さず夫よりも猶ほ同士一同の身の上が氣遣はしく「シタガ一同ダ其の魔が淵へ着くのは何時頃でせう　想「一同は四月一日までに此地へ乘込む

目算で三月廿四日の午後に一人〳〵間道を傳ひブルセルを忍び出ましたが何でも魔が淵へ着くのは廿八日の夜あたりでせう梅眞は色を變へ「今日は是れ廿七日、爾すると明日の晩が大事の所、夫までに此方から魔が淵の猶ほ先まで出張して一同に知せて遣ねばと云て今からでは間に逢ふのも覺束無いが　想「爾思つたから私しも晝夜兼行で馳て來ました、最少し早く來る積でも楢尾が內々私しの振舞を見張つて居て中々拔出る暇が無く夫ゆゑッイ遲れましたが　梅「イヱ遲れたのは今更ら云ふも返らぬ事、直に働くが肝腎です」夫人は暫し煩悶せし末、席を蹴て遽だしく立上り「最う斯しては居られぬ場合、直に是から立夫を救ひに行ませう、爾すれば守雄等一同も助かるし、愈々一同に逢た上、私しから詳しく守雄に話し立夫が一時の心得違ひで楢尾に雇はれた其次第を說明せば守雄も分つた男だから立夫の罪を赦した上で私しへ返して呉れるだらう、敵の間者は射殺すと云ふ一同の定

め最も立夫は外の間者と逢ふ夫に私しの顔を見れば立夫も必ず後悔し間者を止て仕舞ひます、後の事は何うとしても立夫か私しの手に歸れば彼れに最う二度と再び政治などへは關係させません斯云ふ中も時刻が移るサア早く、梅眞や馬車の用意をさせ和女も直に仕度をして斯なれば男爵の不爛白刃とやらも役に立つ事が有う、早く、サ早く」と夫人は狂氣の如く急ぎ立ち是より三十分と經ぬうちに梅眞と共に四頭立の馬車に打乘り、男爵相須根を新しき馬に乘せて車の護衛ゑ供へつゝ大急ぎにて巴里を立ちしは彼の守雄等がブルセルを立てより三日目に當る三月廿七日の夕方なりき知らず果して魔が淵の間に逢ふや如何に

話し變りて茲に又妖陀の所天有藻守雄は廿四日夕刻に妖陀と共に馬を並べ土耳古の人有井と云へる馬丁を從へ忍びやかにブルセル府を立出でしが町を外れてより幾里をか進むうち、兼て連名せる決死の同類打合せの通り其所此所にて馳加はり夜の明るまでに總數十五人に揃ひしは全く此打合せの役に當りし帶里谷大尉の能く行届きたる爲なりと云ひ守雄は益々帶里谷の手際に感服せしが獨り妖陀は守雄に次て第一の力と頼む奴頑平の加らざるは最と本意なき事に思ひ、馬を並ぶる所天に向ひて「頑平は何うしたのでせう」と幾度も打問へども「彼れは和女も知ての通り織部夫人を送り巴里へ行き未歸らぬから仕方が無い、忠實無二の男だから決して心を翻へす樣な筈は無いが或は歸る道で捕はれたのか夫とも今にも道中で走加はるか今更ら心配しても屆かぬ事だ」と答ふるのみ　妖「でも頑平が一人欠けたのは貴方の右の腕を失つた樣な氣がして私し迄も心細く思ひますが守夫は爾だが、彼れの居ぬ代りに彼よりも尙優つた帶里谷大尉が加はつたから同じ事だ、初から先鋒隊と極た者は十五人で今でも矢張り十五人だから何も不足は無いと云ふもの」左わらぬ体に答ふるを聞ながらも妖陀は尙

ほ心穩かならず、又しても頑平が事繰返すに守雄は夫等の心配を云ふ時に非ず多年の間艱難に艱難を重ねて待ちたる大願成就の時來りしと思へば心は唯だ其方にのみ忙しく果は妓陀が三言の問にも唯だ一言しか答へぬ程となりたるも守雄に代りて帶里谷大尉が毎に其等の返事をしつ痒い所に手の屆く如く妓陀の心を慰むるにも妓陀も左までには落膽せず成る程頑平の代りに斯る深切なる同類が加はりしかと哪か氣の弛む事も有り、去れど何故にや帶里谷の美しき顏の中には何やら氣に食ぬ所あり時々は彼れの聲を聞き我にも非ず身を震ふ事も有れば妓陀は却つて帶里谷よりも幸助有井の兩人を頼りにし馬の脊中に長き道中を辿り〳〵て翌日の晩は彼のオーニエルなる水車場へと到着したり

第二十一回

オーニエル河の水車場までは何事も無く着きて一同玆に一泊したるが一同の爲め測らぬ災難と云ふは、如何なる疎相よりか此夜廐より火を發して守雄、妓陀、幸助、有井などの乘馬初め外に七頭ほど燒死にて唯だ帶里谷大尉外三名の馬だけ救はれたり、守雄は此災難に一方ならず立腹せしも今更ら如何とも詮方なければ、堅く此後を誡めて敢て疎匆の元を糺さず兎に角も代りの馬を買入れねば此上進む事難けれぱとて直に此家の主人を伴ひ、馬買集めの爲めと云ひ一同を待せ置きて孰れへか立去りしが妓陀は是が爲に一方ならず心を痛め、今まで我が乘慣せし大事の馬の死したるを悲むのみか斯る事の有ると云ふも一は奴頑平の如き何から何まで油斷せぬ男の居無くなりし爲と思ひ、或は又若しも我が同勢の中に敵に心を寄する者ありて敵に待伏の用意をさせん爲め故と廐を燒きて一同を後らせたる者には有らぬかなど疑ひ、智慧に捷き幸助を傍に寄び私に其の意見を聞くに彼

れも同樣の疑ひを抱けるのみか彼れは猶ほ帶里谷大尉を疑ひて夫か有ぬか大尉は昨夜切りに此家の主人に向ひ密々何事をか語ひ居たりと云ひ猶ほ大尉の馬の無難なるも怪むべき一つありと言出せり勿論取留し證據無ければ取上るにも足ざれど智慧に捷き幸助の言葉なれば妙陀も空しくは聞流さず是より夫とは無く帶里谷の擧動に目を附け初むるに彼れ相變らず信切なる軍人にして守雄の留守とても更に變りたる所なく何から何まで能く氣を付け影日向なく部下の兵士を痛はりて其の稽發を起す如き事ばかり言聞せ猶又妙陀に向ひても今に守雄が良き馬を買入て歸る可き故初て乘る馬には何々の餅を注意せよなど爲になる差圖をも與へ且は心を慰むるにそ幾時と經ぬうちに妙陀は幸助の言葉を忘るゝと云ふ程ならぬも初めほどの重きを置かず夫よりは先づ守雄の歸るを待焦るゝに至りしが頓て晝を過き二時三時の頃を過れど守雄は猶ほ歸り來らす一層此身も

守雄と共に馬買入に行きしあらば斯く待遠しき事も有りまじきにと今更ら返らぬ事を悔ひ、是より又數時間を待通して日も全く暮れたれば妙陀は獨り窓に出で若しや守雄は何かの過ちにて敵の手に落ちたるには有らぬかと行きし方の空をのみ眺むる此所へ彼の帶里谷大尉も毎に無く心配氣なる面持にて入來り「何うも餘り遲過る樣に思ひますから、是より私しが尋ねに行ふと思ひますが」と云ふ、帶里谷まで斯く云ふからは餘程氣遣ふ可き廉あるに相違なしと妙陀は早や涙を浮めて「私しも御一緒に參ませう」帶里谷は少し驚き「奥方、何有るは御尤ですが若も守雄殿の身に變でも有れば我れ々事に由ると其場で敵の中へ切て入れば成らぬかも知れませぬ貴女の立會ふ場合では有ませんから私しへ任せてお置成さい私しは兵士の内で四人か五人を引連て行きますから貴方は馬丁の有井でも幸助でも或は其外信任する者を一人連れ兎も角もナルツセルへお歸り成さい、遲くも明後日

までには私しから便りを仕ます夫とも又守雄殿が無難で歸れば直に貴女を迎ひに上げます」妙陀は益々顔色を失へども此信切なる仕向を聞きては眞逆に幸助の疑ひし如く此人に僞り有んとも思はれず「ハイ今一時間も待て見まして其上で歸らねば何とか致しませう」大尉は軍人の氣風を示し「エ、今一時間、其樣に延す中に吾々の心配は增すばかりです、守雄殿に萬一の事でも有れば、救ひが一時間後れるのは事に由ると百年の後れに成ります」此言葉は妙陀の胸に毒矢の如く膺へたり、妙陀は今は泣聲にて「夫では直に御出張を願ひます、私しの身は後で何うとも致しますから」大尉は早速に立んとして、又何事をか思ひ出せし如く躊留り「オヽ心配の餘り忘れて居ました、實は――と言掛け聲を虫の音ほど低くして「實は守雄殿から、若もの事が有た節には、ト、堅く頼まれて居ますが今は其頼を行ふ時かと思ます、奥方」妙「ハイ」雪「斯あれば貴方の身とても安心とは云はれません、我々一同明日も

知れぬ程の場合ですから我黨の秘密を最も堅固に仕て置ねば成ません、愈て守雄殿の頼みに已が死れば已に代り我黨の秘密を守護して呉れと申されました妙陀一人では女の事とて覺束なく思ふから、帶里谷お前が聞て置て呉れゝばと此樣に」妙陀は唯ならぬ思ひにて「とは何の事柄ですか　雪「貴女の預つて居る手箱の隱し所です

第二十二回

秘密の手箱は安くに在るや、之を問はれて妙陀はドキりと驚きたり、妙陀若し先に幸助より帶里谷大尉の疑はしき事を聞かざりせば今此問を怪まず却て我が重荷の休まるを喜びて詳しく其隱し所を告知せる所なるも、妙陀は今猶ほ幸助の言葉を忘れず、否殆んど忘れ居たるも帶里谷の問に逢ひて忽ち思ひ出せしなり、我黨一同の生命とも云ふ可き品なれば兼て何人も思

ひ寄らざる最不思議なる場所を撰びて深く隱し置ける程なるに、爭でか露ほどたりとも疑ひの有る人に話さる可きや、守雄が眞實に斯く差圖を與へ置きたるやも知れど一旦口より出しては取返しの附く事ならず、當然と云はば當然に似たれば疑ひを帶びて見る時は彼れが彼箱の有家を問ふ事愈〻以て疑はし彼れ或は寢武の命を受け彼の箱を盜み出しに來し者ならぬか、斯く思もへば今まで彼れの深切に感じ居たるに引替へて殆んど憎々しく成りたれど妓陀は暫し無言にて彼れの心の奥底まで見破らんとする如く彼れの顏を眺むるに、難有し難有し此時孰れの邊よりか遙に蹄の音聞えて許多の馬の走來るに似たれば妓陀は之を機に「オヤ守雄が歸つた樣です」と云ひ庭の方へ走出るに果せるかな幾匹の田舍馬を連れ此家の主人と共に所天守雄が歸り來れり、妓陀い嬉しさに堪へ兼て「能く歸て下すつたと守雄の腕に縋り附けば　守「オヽ是だけの馬を買集るのだから非常に手間が

取れ、到底豫定の日限を一日だけ無駄に潰した」と打咲やく是も亦疑ひの種にして或い昨夜庭の燒けしも幸助の言葉の如く帶里谷のする業にて一方にい一同を後れさせて敵に用意の暇を與へ一方にい又守雄を留守にし手箱の所在を問落す計みにい有ねか、左すれば此儘に捨置き難し早く次第を守雄に打明け帶里谷に氣を許さぬ樣に、させんと獨り心を惱ませども其うちに早や帶里谷は一同の者と共に出迎ひ守雄の燒りを圍みたれば妓陀い其意を果さずに退きたり、是より守雄は一同に馬を與へ、無益に一日を捨たれば此上茲に留り難し夜を冒しても進まんと云ひ一同の仕度を促し、又も水車場を出立せしが川を渡りてよりは程なく山路へ差掛り、人の知ざる廣が淵を指して行く事なれば殆んど道なき所を分登る程なれど既に案内を見極めたる幸助が眞先に立たれば方角を失ひて迷ひ入る患ひは無し、斯く進み行くうちに妓陀は儘の折を見て守雄に向ひ帶里谷が手箱の所在を問

ひたりとの事を語るに守雄は少しも怪まず、夫は帶里谷が能く役目を盡したと云ふ者だ、己に萬一の事が有れば和女も生ては居ないと思ふから己は帶里谷に爾賴んで置いた頑平でも居れば格別だが頑平も居ぬからは兩人の亡き後で箱を燒捨る者が無い、何うしても帶里谷に其事を賴んで置かねば　母「では帶里谷大尉は縱し貴方が亡成ても此世へ生殘る覺悟の人ですか　守「己が死れば生殘つて敵を取て貰はねば」姿陀は殆んど恨しげに「貴方に若しもの事が有れば私しが生殘つて敵を取ります、其敵を取る迄は何の樣な艱難しても私しは此世に生て居ります　守「和女は爾思ふ覺悟でも信任する者だけへは箱の所在を知せて置かねば、全体云ふとアノ箱の隱し場所も未何だか不安心だ、人の入込れぬ所でも無し、何の樣な事で見出されぬとも限らぬから事が若し破れるを見れば雖でも馳歸つて燒捨ねべ」母「ですが貴方は夫ほどに帶里谷尖尉を信任して好いとお思ひ成さるのですか」

とて更に彼の幸助の言し疑ひを述んとするに守雄い一言に打消して馬を帶里谷の方へ進めたれば、姿陀は本意無き思ひにて獨り心を痛むるのみ、是より二夜を山に明し三日目の夕刻に漸くやゝ一ツの谷川近くへ押寄たるが姿陀は猶ほ帶里谷に氣を許さず、夫とは無く彼れの擧動を伺ふに彼れ何故よや谷川の近くなるに連れ今までの活潑なりし樣子に引替へ追々打鬱ぎて果は口さつ碌に聞かず自分では隱さんとする樣子なれど胸の中の心配は包むに由なく動ともすれば氣遣はしげに彼方此方を偷み見る樣唯事ならず、姿陀は私に其仔細を考へ或い此川の向岸が敵の待伏する場所にして彼れ其伏兵の用意調ひたるや否を氣遣へるには有らぬかと其身も成る可く彼が偷み見る方をのみ眺むるに彼れの眼多く向岸に注ぐに似たり、扨こそと思ふうちに遙か彼方に星の如き一點の燈光あるを見たれば是れ或は敵より帶里谷の合圖ならんと姿陀は馬を幸助の傍に寄せ件の光を指し

て闇ふに幸助も初て心附し如く鉄の上に身を延して打眺め「ア、彼れが丁度ペロ[illegible]の鎖蟲ですよ屋根の上に常夜燈が附て居るのです、サア是から最う魔が淵は一里半です、十一時には向ふ岸へ渡られます」此言葉を洩れ聞きて一同痛く勇み立つ中にも殊に帶里谷は今までの心配忽ちに晴れし如く「爾すると夜の明る頃には我黨は最う饑蟲を五六里も背後へ見る事となるな、愉快〳〵」と雀躍せり、獨り妖陀は益々怪み常夜燈とならは勿論合圖に有ぬ事明白なるも夫にしては帶里谷の樣子忽ち變りしは何故にや同じ常夜燈にして何何かに合圖の意を含まずは斯まで彼れが打喜ぶ筈は無し疑れにしても魔が淵へ届く迄には猶ほ思ひ當る事あらん其時こそは如何にしても守雄を呼留め我疑ひを悉く打明けんと窃かに用意を堅めしは女なから[illegible]健氣と云ふ可し

第三十三回

彼の常夜燈若し合圖に非ずば島居立夫が俄に引立ん筈は無し、妖陀は折を見て所天守雄に此事を告げんものと窃かに思案を堅むるうち何時しか魔が淵の際に着きしが、此時宵月は早や入りて便と雲るゐ星の明り、向岸さへ見え分ぬ程なれば妖陀い益々氣遣いしく殆んど死地に入る思ひなれど守雄い却て之を喜び此樣な夜に此樣な危い所を渡るとは幾等賽武でも思ふまい」と云ひ先づ堤の影に勢を揃へ離れい前、某は後と十名列を定むるに獨り彼の島居立夫は此差圖に服せぬ如く「有藥君今夜こそ大事の場合だ、人力の心を配らぬ人ならぬ、何の樣な所から敵が現れるか分らぬから君は幸助と共に一番後へ立ち給へ、僕は背後を固める爲めに列の一番後へ附かん」と逆に進去る樣な卑怯者は我黨に一人も有るまいけれど何しろ殿は大切だ」と云ひ自ら背後へ廻らんとす、此振舞を以て疑ふ可し、彼れ向岸に危難あ

りと見、謀逆の時には己れ獨り逃去らん覺悟なりんと姫陀は殆んど確切もつゝ守雄の返事如何と待つに守雄は却て感心せし如く「爾た勇士は殿を名譽とす、君に殿を頼まうか」姫陀がパッと思ふ間に、幸助も同じ思ひと見て鐵心に故障を容れ「イヤ帶里谷大尉の樣な大切の人を背後に廻すと云ふ事は有りません、背後に敵の有る筈は無いから少しでも勇氣の勝れた者は皆前へ並ばねば行きません、殿は此幸助が一人で引受ます」立夫は大事の所と見て「幸助殿は案内者で無いか、君が殿へ廻つては、何うして淺瀬が分ると思ふ、吾々は水底の深い淺いを知らぬ故、是非とも幸助殿は有藻君と共に一番の前へ立たねば」守雄は此言葉に感心し「爾た殿は何しても帶里谷君だ」と言切りより、姫陀も最早や見透し難し今云はずば何時か云はんと決心し守雄を少し離れし所へ連れ行きて耳打せんと馬を守雄の傍へ寄せるに、立夫は夫と察してか夫とも知らず計みありてか、姫陀より先に守雄の手を引き「君少し

密話が有る」と云ひ、馬の傍にと一方へ引去りたり、密話とは何の事にや、必定彼の手箱の所在を今茲、よて守雄の口より聞取らんと思ふ者なり、手箱の所在をさへ聞けば、何時守雄を捨て逃去るとも己れの手柄は充分なれば、彼れ其用意に相違なしと姫陀は守雄に叱らるゝをも厭はず、其傍へ馳せて行く其悲しや早や二人の密話は濟み、立夫は最と滿足の体にて「有藻君最う安心し玉へ、君が死れば僕が其手箱を守るから決して敵に奪はれる氣遣ひは無いナニ眞逆に君が死る樣な事は無いが、用意は用意だ斯う何も彼も定めて置かねば夫が爲めに又何な後れを取る事が無いとも云はれぬ、好しく最う彼の手箱は不肖帶里谷が命に替て預つたと思ひ給へ」嗚呼事既に後の祭なり手箱の所在は早や既に敵の間者の耳に入りたり、姫陀は帶里谷と引連へて守雄に近き殆んど必死の力にて守雄の腕を握りぱめつゝ「貴方は最う大事の秘密をアノ人に知せましたか　守　勿論サ魔が淵を渡る前に必ず彼

れへ頼んで量かうと兼て心に定めて居たから」殆陀は殆んど咽ぶ聲にて「貴方は先ア、貴方は先ア」と守雄の腕を搖ぶりて悔し涙を止め得ず

第二十四回

一同の命とも云ふ可き手箱の在所を早や帶里谷に知せしとは取て返せぬ手落なれば殆陀は悔し涙に呉れ「エヽ貴方はアノ人を怪いとは思ひませんか、アノ人は敵の廻し者に極て居ます」守雄は殆んど立腹して「和女は何を見て眛方の勇士を疑ふのだ」「アノ帶里谷が眛方の勇士、爾仰有るから間違ひます」「和女も今は帶里谷を信じて居て」「ハイ今までは充分に分ちから別に疑ひもしません」「が今は何も彼も分りました、底を燒たも彼れの仕業、彼れ兼てより敵に心を寄て居て」「同を巴里までの道中で捕へさせやうと夫で我々を一日でも後らす爲め、アノ樣な事を仕たのです、イエ女の

淺墓な推量では有ません、爾ですよ爾ですよ、最う夫に極て居ます、其證據には彼れが今夜の振舞を御覽なさい、彼れはベロームの常夜燈の見ゆるまでは心配氣に打塞いで居ましたが、常夜燈が見えてから俄に引立て參りました常夜燈とは云ふ者のアレが彼れへの合圖です、合圖さへ見えぬから彼れは未敵の手配が出來ぬかと夫を氣遣ひ今は又合圖を見て自分の手拵の成就する時と夫を喜んで居るのです、其上又彼れが殿をすると云ひ出したも同じ目算、彼れゝ一同に此河を渡らせて自分ゝ獨り背後へ逃げ、廻り道して敵の居る所へ行く積です、ハイ敵へ手箱の秘密を賣りに行くのです」と細く語ながらも最早口に說明せり守雄ゝ「ナニ其樣な事が有る者か」と面ゝ輕く聞流せしも內心ゝ稍や此言葉に動きしか引續いて「イヤ何に夫でゝ殿をさせずして彼れを己と一緒に前の列へ立せる丈だ、夫を彼れが否だと云へば成る程幾分か怪いと認めるか左も無ければ少しも疑ふ廉ゝ無い、夫に和女の言

葉を聞くと何だか敵が向岸に待てゝも居る樣に思はれる、アハハハ是は可笑い」と打笑へど、笑ふ其聲に餘韻なく最と陰氣に聞ゆるは心に穩かならぬ所ある爲ならん、妸陀は猶も涙聲にて「サア私しも向ふ岸が危ないと思ふのです、戯間ならば兎に角も――」守「馬鹿め、戯間にペロームの鎖蠻の下を通られるか　妸「でも有ませうが女の言葉と聞流しては間違ます、今まで一言も貴方の爲さる事へ口を出した事の無い私しが斯まで思ふのは能々の事と思ひませんか虫が知すと云ふ者か私しは最う氣に成て、氣に成つて　守「虫が知らせる其樣な詰らぬ事は聞て居られぬ」と云ひ守雄は手を拂つて去んとす、妸陀は猶も引留て詰らぬと仰有つても私しには災難が前以て分る樣に思ひます、幼い頃母を失ひました時も其の前夜に母が棺の中に横はつて居る所を歷々と夢に見ました、昨夜は夢に又貴方が――　守「オヽ己が何うして居る所を見た己が若し向ふ岸で殺されゝば棺などに入て葬られる

事は無く直ぐ谷川へ投込れるから己の死骸が流れて行く夢でも見たのか」妸「イヽエ其樣な事では有ません、貴方が薄暗い牢の中で繋がれて居る所を見ました」守雄は此一言に寒風の身に浸む如くゾッと身躰を震せしも、心弱くては叶はぬ場合と決然たる聲を發し「何が何でも今更ら退かれる時で無い敵が向岸に待伏して居る程なら引返したとて追て來て捕はれる、夫に又帶里谷大尉を疑ふなどは此上も無い間違大尉は我黨の恩人から親書を附けて寄越された人と云ひ今までの熱心でも其人柄は分つて居る、夫でも猶ほ氣遣はしいと云へば前の列へ廻すから和女も安心するが好いとて靜に妸陀を拂ひ退けたり妸陀は益々泣る聲にて「貴方が夫ほどに仰有れば最う何にも云ません貴方が若し捕はれば御一緒に捕いる丈ですが唯一つ伺つて置度いのは、アノ帶里谷大尉に何も彼も打明て仕舞ひましたか守雄は更に聲を潛めて「手箱の中の連名帳に無い名前だけは未だ知らさぬ」妸

連名帳に無い名前とはアノ朝廷に居る大將軍の」と云掛ける口に手を當て「爾サ、己が此通り艱難辛苦を重ねるも一つゝ大將軍の深い恩に報ゆる爲めだ、假令へ吾々の熱心で路易を擒に仕た所で大將軍が其間に朝廷で路易王廢位の布告を出し夫々大臣を任命し寢武其他の奸物を取退ぞけねば何にも成らぬ樣な者、今までの恩と云ひ大將軍の名前ばかりゝ和女の外へ知せて無い、己と和女の口から洩ずば寢武でもアノ人が吾々の大將軍だと知りはせぬ其外にも織部夫人を初め身分の高い人々ゝ連名帳に附て居ぬから此秘密ゝ和女が守て呉れねばならぬ」と毎もより親切に言聞せ、更に妖陀を引寄せつ眞心篤めて接吻を施せば、妖陀は所天の愛の猶滾らぬを見、今までに覺えねほど嬉さ胸に解渡れど是が生涯の告別ひに成はせぬかと、又悲しさの込上るを涙と共に呑込みて暗にも紛らす心の中は慰ひ遣るだに憐れなり斯る折しも幸助の聲として「最う一同の用意が出來ました」と傳ふるにぞ守

雄は未練も無く馬を返し幸助と帶里谷の間に入り「サァ三人が前の列だ、後は思ひ〳〵に續くが好い」と嚴重に言渡すに帶里谷も最早や辭むに好なく馬を並べて魔が淵に飛入れり妖陀も何か猶豫せん一同と共に其後に從ふに淵とは云へど谷岸にて馬の脊の立ぬと云ふ程にも有らず唯だ流れ最と急にして水音も激しき故、一歩誤れば如何なる事と爲らんも知れず用心に用心して進むと凡そ半時程にして漸く難所を通り過ぎ同勢殆んど一塊りとなりて間近く向ひの岸に着かんとするに、守雄は獨り四五間ほど衆に拔出で早くも馬を堤の上に立て「アヽ思たより優しかつたサァ諸君最う少しだ」と振向て勵ませしが此聲の終らぬうちに忽ちハッと「塔の蔭より燃上る火の光り是なん敵の隱し居たる松明なる可し」と聞れたる一同の眼には乾坤一時に明るむかと疑はるゝ程にして其中に爆然たる鐵砲の聲ありて哀れ守雄は唯一發に射留められ眞逆樣に馬より落ちたり

第二十五回

守雄が馬より落ると齊しく五六人の兵士重り掛りて彼れの死骸を堤みの蔭へ引摺り去ると見たるが此後は唯だ大の混雜にて何が何やら見分も附かず「夫れ敵の伏兵だぞソレ大將が殺されたぞ」と叫ぶ聲は殘る十四人の口口より突て出しも流石決死の面々なれば此場に及びて逃去らんとする者一人も無く一樣に馬を躍らせ彌々と堤の上へ登らんとしたるも一時に打出す敵の彈は只だ雨の如く霰の如く須臾くにして馬傷き人倒れ、川の水まで血の色に變じたり、妙陀も一同と共に早く堤に推上り、縱や守雄を助くる事は叶はずとも切ては彼れと頭を並べて死なんものと只管ら馬に鞭あつれど田舍にて買入し百姓の馬なれば彈の音に驚きてか一歩も進まず、悶かしさ限り無ければ「唯だアレ〳〵」と鞍の上にて揉搖く間に、飛來る敵の彈は馬に當り、妙陀は馬と共に水の中に落入たり、多少は水練の心得も無きに有

らねば結句此方が心易しと直に水中に立上るに水は左までに深からず漸く乳の邊へ屆く迄なり、岸は唯だ二間ばかりの所なれば如何にもして漕附んとするに悲しや我が足は猶ほ馬具に搦まりて、流るゝ馬に引倒され味方の苦戰を目に見ながら空しく水底に引込れたり、頃しも三月の末なれば雪解の水の冷きと殆んど讃ふるに物も無く此儘、十分間も水中に沈まんには凍え死ぬと必定なれど幾程も無く幸ひに足搦みを取外し得たれば直ちに又立上るに此時は早や味方の者悉く殺されて砲聲も既に鎭り松明さへも消し盡したる後にして唯だ闇の中に敵兵の互に罵り合ふ聲を聞のみ　甲「何だ敵の大將と副大將とは殺して成らぬと言附たのに麼殺に仕たでは無いか　乙「殺した後で其樣な事を云ても仕方が無い、サア〳〵死骸は定めの通り石を括つて川の底へ投沈めるのだ　丙「イヤ大將だか副大將だか分らぬけれど一人だけは微傷で生て居るから早や捕縛して猿轡を食せて仕舞

た、兵卒の暇では無く士官の服を着けて居るから大將副大將兩人の中に極つて居る、連て行て聞れば直に何方か分るだらう是等の聲の歴々と耳に入りたれば妓陀は我黨の多年の大望爰に全く破れ盡し力と頼む面々まで殘り無く死せしを知り絶望の餘り其儘水中に沈死なんと思ひしがイヤ〳〵士官の服着けし一人が生殘ると云へば或は守雄なるやも知れず夫とも帶里谷大尉にしても彼れ今は一同の命を賣りし事明かなれば彼れが此世に生るうちは吾身猶ほ死ぬ可からず第一に先づ彼れか守雄かを探り定め守雄と分らば救ひ出さん守雄死して彼れ一人殘れりとせば女ながらも守雄の仇を復さずに置かる可き、同勢皆死するとも猶ほ奴頑平だけ孰れかに生殘れる事確かなれば孰れにしても今死ぬ可き時に非ずと少しの暇に急しく思案を定め又も揉きて堤の方に進まんとするに、味方の死骸を川の中へ投込む水音、幾度びと無く耳に響きて物凄きと限り無し、其中に妓陀は早

や身体の徐々と凍え來り手さへ足さへ意の如く動かぬを覺えたれど、岸は只だ目の前なり、今一息と我心を引立る折も折、トッサッと流れ掛るは今投込まれし死骸の一つなる可し、妓陀は又もや之に打倒され今度ころは最早や生殘る心も無き迄に水底深く沈み込み、音に聞えし急流に幾間か流されしが、猶ほ壽命の盡きざりけん、何やらん手に觸るもの有りと覺えて、幾かに殘れる力を絞り必死に其物へ縋み附きしに是あん堤の崩れたる所より川に倒れたる木の枝にて、妓陀の組り附くと共に身体の重みと水の勢ひ、其枝に加はりて自づと妓陀の身体をも堤の崩れへ引寄せたり、妓陀は殆んど何の爲めに斯く引寄られしやを知らぬ程なるも縋かに我身体の流れ上りたるを喜び、堤に繁る蘆の中へと這上りしが、爰よ到りては最早や魂盡き氣疲れて殆んど一歩も進む能はず、殊には水中に在りし時よりも猶一入の寒さにて手も足も千切れ去るかと疑はれ、骨までも痛むにそ、獨り絶入る心地に

て口に守雄の名を唱へながら其所に倒れし儘、死するが如く眠るが如く昏々として生死の境に迷ひしが、幾時か經て宛も悪き夢に魘はれし人の如く忽然として我れに返れば寒さは初めの如く寒くして胴震ひの止らぬ程なれど心の底の孰れにか一點猶は未だ亡びざる生氣あり、殊には守雄を初め一同の無惨〳〵暗打に逢たる樣の今も目の前に殘れるにぞ、其悲さ其悔しさの一念を杖にして茂の中に立上れり。

第二十六回

有藻守雄の多年の大望も哀れ一同の命と共に魔が淵一片の水烟と爲りて終り、反謀も茲に消え旗揚も茲に盡きて殘るは唯だ行先の定めも無き妙陀あるのみ妙陀は凍ゆる身を起して茂の中に立上り此方彼方を見廻はすに、四邊寂然と靜にして蘆の葉に戰ぐ風だも無し、今より纔か一時間前に此所

に砲聲響き此所に劍影閃めきて修羅場を現はせしとは誰か思はん、敵の兵士も其手柄に安心し疾く立去りしと疑ひ無ければ徐ろ〳〵と茂りを掻分け堤みの上まで這上るに此時初めて目に留るは宵に見たるベローム鎭臺の常夜燈なり、曲者滯里谷に合圖して一同を亡せしも此の常夜燈にして敵兵が擄を連れて引上たるも此常夜燈の下なるに相違なし、思へば悔しさの堪難く如何にもして彼の常夜燈の許に行き、孰れかの隙間より鎭臺の中に入込み、擄の守雄なるや滯里谷なるやを突留ずには置難し、所夫の生死定め難き今と爲り我身の捕はるゝを何か恐れん、捕はれて巴里に送られ自ら塞武に調べらるゝ事とも成らば切て怨みの一言も吐聞せ守雄の妻の侮り難きを知せ呉れん、是れ死ぬに增す本望なりと、暫し常夜燈を睨み詰め拳を握るのみありしが、一念凝りて勇氣と爲り、寒さも暗さも打忘れてスラ〳〵と堤を降たり、茲にて先づ衣服の濕を絞り出すに唯だ幸ひに水獸の皮にて造

りし、胴着を着込み居たる爲め腰より上は濡れ通らず、手足の冷き程にも無く胴だけは温かなれば、其中に裝までも乾くならんと、是より只管らに常夜燈を目當にして轉けつまろびつ辿り行くに凡そ三時間餘りにして夜の引明に鐵蜜の裏手に着きたり、此間の艱難は殆んど譬ふるに物も無く、道無き野原の石に躓き藪らに迷ひ入りては荆に手足を引裂るゝなど、最早や一歩も進み難しと氣落せしと幾度なれど其度に常夜燈に勵まされ辛くも茲まで來りしなり、扨孰れより忍び入り如何にして據を探らんかと夫等の思案浮ばねども先づ取敢ず鎖蜜の周圍を繞り見るに表の門には大戸を鎖し外には劒持ちし二人の兵士が嚴しく擁へ居る、隙間の有う筈も無し、中の樣子は眠りし程靜かにして人氣の有るやと怪まるゝばかりなれど茲より外に彼の據が留置かる場所有りと思はれねば再び背後に引返し横手へと廻り行くに、横手の塀の低き所に裏門とも云ふ可き潛あり、其戸は開放せし儘に

して内に火の氣も見ゆるに似たれば忍び入るは此門なりと少し離れし所より猶も樣子を伺ひ居るに、天の助けとも云ふ可きか、内より何やらん入物を擔し男、欠しながら出來りて「ア、夜が短く成た、少し眠れば直に明ける、毎朝のお菜買入も辛いけれど是も役目だ仕方が無い」と云ひ向ふの方へ徐ろ〳〵と立去りたり扨は此所鎖蜜の賄ひ室にて今の男は賄ひ方と知られたり、此暇に忍び入らずば孰れの時に忍び入らんと、妙陀は恐しさも知らず宛も夢地の心にてフラ〳〵と歩み入るに、内は五間四方も有る程の土間にして其片端に大なる竈あり殊に火までも起り居るは麭を燒く用意と知らる、這入ると共にムッと空氣の温かなれば今までの寒さ一方ならざりしに心附き我にも非ず火の傍に馳寄りて其身体を温め、初めぬアヽ妙陀氣でも違ひしと云ふ可きか、猶ほ大望の有ればこそ忍びに忍びて茲までも入込みしなるに、今は夏虫の火に引かれ猛々の酒に迷ふ如く竈の傍に引寄せられ、殆

んど前後も知らぬまでに身を焙るとは何事ぞや、妫陀は全く其身の危きを忘れたるか、否々渠れ唯だ今まで身に餘る苦みを胃せし爲め、氣力全く盡果て心ウットリと遠くなり、忘るゝとも無く忘れぬとも無く一切の事總て心に移らずなり、眠りもせずに夢地に迷ひ入たるより、斯る例しは間々ある事にて此まゝ眠り込まんには終よ目の覺る事なくして消るが如く此世を去らん、幸ひにして目が覺れば却て今までの疲れを忘れ身躰の爽かに成る事も有り斯て暫しがほど夢と現との堺に徘徊ふうち、外より誰やら入來る物音に妫陀は忽ち驚き覺めしが冷たかりし我が顏の火に焙られて熱きを覺え、二度三度手の掌にて頰の邊を撫でながら當りを見て、初めて我身の虎の口に眠り居たるを知れり、知りたるも如何にせん、晴ひ方の早や歸りて其の重き足音は戸の外よ聞ゆるにぞ最早や遁れん所は無し、唯一方の逃道は土間より奥の方へ通じたる廊下なれば、此廊下より如何なる所に到るやは思ひも見ず、右左の思案も無き中に早や其廊下へ飛上り奥へ〳〵と逃入りたり

第二十七回

奥へ〳〵と逃入りて廊下を幾曲りか曲りし末、妫陀は我足音の最高く響けるに心附きたり、猶ほ何人も起出ず無人の境かと怪まるゝほど靜なる所なれば今にも誰かに聞咎められるゝ事必定あり、孰れかに身を隱し樣子を伺ふ場所は無きやと怖氣の餓に立たれば足音を潛めてウロ〳〵と見廻すに四五間先に廣き階段あり之れに沿ひたる一室は戸の端少し開けるにぞ、先づ其の所に忍寄り密と斜に差覗けば中に密々と語り合へる人あるを見る、猶何人も起出ずと思ひしに早や何事をか相談せるとは愈々我身の危きを增す者なれば見られぬうちに立去らんと一足引きしが我身は何の爲に來り

しぞ敵の秘密に立入て守雄と帶里谷の生死を探らんが爲なれば少しの言葉も聞洩す可に非ず、人の起ぬ間に相談するとは雑兵輩の仕業に有で必定重き役目ある人同士に相違無れば之を聞ずして何をか聞んと只と身体を壁に寄聞居に　甲「だけれど死骸の數を算へずに其儘谷川へ投込とは少し不行屆きだよ」扨ころ〳〵魔が淵の始末を相談せる　乙「イヤ確ですよ、死骸の數は調ず共一人も生て逃た奴は有ません何でも死骸が廿程は確に有ました」甲は少怒れる聲にて「ソレ夫が間違だよ死骸が廿も有筈が無同勢十五人の決死隊だから」乙は少も失念らず「イヤ廿位と思ふ程ですから十五は確に在ました、鏖殺です　甲「鏖殺と云は決して鎮臺長の手柄て無、人を射に馬を射と兼て言附て有たじや無か、生擒のが此方の目的だ」扨は一人が此鎮臺の長にして我同士を鏖殺にせし事を叱られ居る者と知らる、去るにても鎮臺長を叱るとは如何なる權威高き人なるや、彼が若し兼て守雄の恨たる寰武

にて故々此地へ出張せし者に有らぬか斯く思ひては俄に動悸の高くなるを覺ゆれど今は如何とも詮方なし、頓て又甲の聲「シヤが其中に十八九の少年と見認る者は無かつたか　鎮「ハテな十八九の少年――　甲「イヤ少年と見えて實い廿歳ぐらゐの女だよ」此一言を聞き姹陀は顏の火よりも熱きを覺えたり彼れ一同を殺し盡して猶は滿足せず、我身の生殘しや否まで疑ふなるか　鎮「多分其樣な死骸も有たどらうと思ひます　甲「益々惜い事をした其女い是非生擒り度い所で有た　鎮「併し何も彼も能く知て居るのを生擒たから好では有ません」何も彼も能く知て居るとは我所夫の守雄なるか夫とも彼の帶里谷なるか　甲「イヤ〳〵未だ不充分だ、併し今更ら仕方が無い」我身まで生擒らぬを殘念がる此剛慾非道なるは何者にや、寰武の顏は見し事無けれど定めし寰武に相違なし、所夫守雄を初めとし同志一同の讐の本人、他日時來らば第一に彼れに恨みを酬ゆ可き者なれば顏だけも見て

留かんと妢陀は大膽にも徐ろ〳〵と壁を離れ、今度は戸口の向ふに廻り、再び斜に差覗くに平服を着けたる小柄の紳士、眞逆に嚴めしき窶武とは居はれず、且は何とやら見し事の有る氣もすれば且眺め且考ふるに、是なん曾て居酒屋にて守雄が不烟白刃の持主に傷けられし時、其持主と共に來りし賢なる小紳士あり、彼の小紳士が窶武の帷幕の一人にして織部夫人を白寮にて害せし事並びに其名の楢尾明と云へる事も其後に織部夫人より聞きたれば妢陀は大体の事を合點し、魔が淵の計畧を定めたるも此背の短き紳士よなト殆んど其肉を食ひ度き程に思ひたり其中に鎭臺長は猶も言譯の如く楢尾に向ひて「ですが私しの考へでは隨分能く遁た積ですよ、昨日の朝から急に土堤の蔭へ差掛を作り、其上へ土を懸け芝草を植なとして、松明を其中へ隱し敵から見えぬ樣に仕て待て居たなどは　扨ナニ夫位の事は當前だ、生擒る可き者を生擒ぬバ何の樣な手柄も消えて仕舞ふ、生擒る可き

者を生擒らずとは所夫守雄の事なる可し左すれバ生擒られ來りしもの彼の滑里谷大尉にして守雄は水底の藻屑と消失せしか、川の底にて我が足に當りし死骸或は守雄では無かりしか、爾と知りなバ此身も共に抱附きし儘、死ぬ可きを、生殘りしは情なしと胸一ぱいに迫來る涙泣出すにも出されぬ悲しさに妢陀は袖先を嚙めて忍び泣くのみ、中なる兩人は斯くとも知らず。　鉦夫は餘り嚴し過ます、兎にも角にも兵士にまで譯を知さず、アノ通り仕果せたのは私しの手柄ですよ、是で最う彼等の一行が何所で何う成たかは誰一人知る者が有ません、彼等と謀事を通じ今に彼等の吉左右を聞いた上で旗上を仕やうと待て居る奴原は彼等が無事に巴里へ入込だ者と思ひ今か〳〵を吉左右を待て居ませう、一月が二月經ても終に何の便も無いから扨は彼等の心が弛み何事も仕出來さずに散亂したのかと斷念め張合が拔て仕舞て旗上も何も無く天下泰平に治ります、イヱ夫は最う請合です、決

死隊十五人が魔が淵で襲はれたと云ふ事は千歳までも秘密です（譯者曰く此事件は今に至るも暗號にて認めたる當時の公書猶存し漸々歴史上にも記されんとするに至れり）檜「ナニ寢武殿の大目的は其樣な淺墓な了簡では無い、お前の手際は寧ろ落度だ　鎖「夫は情無い事を仰有る、私しが是ほど何も彼も嚴重にして秘密に秘密を守つて居るのに　檜「イヤ罪せられる程の落度で無いましても兎に角お前に此大切な鎖臺は任せて置かれぬ茲はブルセルから攻込む者が大体は通る所で殆んど要の場所だからお前は外の詰らぬ鎖臺へ移して遣る　鎖「夫は何うも　檜「イヤ、詰らぬ場所で最う一辛抱するが好い、其所で又手柄でも現はせば再び登せて遣るとして夫までは爾さ何處が好からうアヽ「ビヂロル」の鎖臺が相當だ今に其の命令が來るから夫まで茲で待つが好い」ト容赦も無く言渡され鎖臺長は痛く失望の体なりしが猶ほ我言葉に重未を加へ「お前が嚴重〳〵と云ふけれど未

だ見張も屆かぬ所が有る既に昨日の日の暮に四頭立の馬車に乘り此鎖臺の前を通つた者が有るのに夫を知まい　鎖「夫は私しの職務の外です　檜「爾で無い、其馬車に乘て居たのは或貴夫人で途中に決死隊を救ふ積で此まで來て色々と旅籠屋などで聞合せて居た、幸ひ世人が知ぬから貴夫人い未決死隊が茲まで來ぬ者と思ひブルセル府の方へ行き過たが、是なども全体云へばお前が其馬車だけでも見て怪まれば成らぬ所だ　鎖「だけれど其の貴夫人とやらが知ずに茲を行過たと云ふも全く私しが秘密を守つて居る爲では有ませんか　檜「夫は當前よ此秘密が洩でもすればお前は「ビヂロル」へ移される位では濟まぬ大牢獄へ入られる程の者だ併し過た事は仕方が無い、ドレ其の昨夜生擒た一人と云ふのを茲へ連て來い」鎖臺長は返す言葉も無く悄々と立上り、約陀の窺ふ戸口へと出來らんとす

第二十八回

今まで暫しが程は楢尾と鎭臺長との話に唯だ聞惚れて在りたるも鎭臺長が擄囚を連れ來らんと云ひて立來るにハッと驚き妬陀は逃去らんかと思ひたれど一筋の長き廊下逃たりとて逃らる可き、殊には擄囚を連來らんと云ふからは何事ありても茲に居て其顏を見極めぬば成らぬ場合、孰れにか身を隱す所は無きやとウロ〳〵眼に見廻せば有難し〳〵梯段の下に當りて物置きの如き所あり是れか我身の命ぞと其戸に手を掛け引明るに中には極々の互樂多を積込みある樣なれど夫等を一々に見極むる暇も無く直ちに飛入りて戸をメるに、久しく閉置きたる場所と見え濕り臭き匂ひして日頃ならば一刻も留り難き程なるも今は極樂に勝る隱場外より明の差込まねば恐しき迄に暗けれど、何うせ身を隱す事なれば暗きも厭ふ可きに非ず、直ちに鍵穴に眼を當てゝ窺き見るに蘆の管にて天を見る如き有樣なれ

ど、穴は大方向ひの戸口に差掛りたれば却て今まで居し所よりも室の中を伺ふに便利なり、扨て鎭臺長は如何にせしか容易に出來らず再び楢尾の許に引返へして「ですが假面の儘で連て來ませうか」と問ふ　曰「勿論サ、兎で調べると云ふ譚には行かぬ今は唯だ假面の具合を見る丈だ」と答ふ、是にて鎭臺長は出來りしが、近寄るに從ひて狹き穴一ぱいに其身体の塞りたれば、彼れが此隱れ場に目を注ぐや否は知る由なきも唯だ彼れ足の調子を違へず悠々と此前を通り過る所を見れば無論怪まぬ者に似たり、是より僅か五分間ばかり經るうちに荒々しき足音の聞え來るにぞ、扨は是れ守雄なるか捕はれしを憤ほりて痛く廊下を蹈鳴し來ると見えたり、帶里谷には斯る勇氣無からん、など種々の推量を廻らす間に早や足音は向ひの間に入りたり、見れば之れ守雄にも帶里谷にも非ず、唯だ釣臺を舁ぎたる二人の士官にして擄囚は釣臺の上に寐たりと見ゆ、爾すれば深く怪我せし爲め自ら歩む事の

出來ぬならんか、其中に二人の士官は釣臺を殘して去り又も鎭臺長と楢尾との二人と成り、齊しく釣臺の左右に立ち怪我人を檢め初たれば妸陀は目をのみ見開けども穴の狹さは變らねば如何とも詮方なく殊には鎭臺長が釣臺の此方に立塞がり丁度捕囚の顏の邊を隱す如き見當に立たれば悶かしさ限りも無し頓て楢尾の聲にて「ナニ傷は唯だ腰の邊を微つた丈だ、一週間と經ぬ内に癒つて仕舞ふ　鱒是だけは生捕たのですから私しの手柄で せう　鱒手柄でもピストルへは送られるから其積りで居ねば了んせ、旨い〳〵假面の口も中々具合が好い斯うして戸をメて居けば鼻から呼吸をする丈で猿轡を食せたも同じ事だ、其代り巴里へ着けば口の戸を外して遣て色々と聞く事が有る」妸陀は是等の言葉に由りて守雄か帶里谷かを推量せんと空く頭を惱せども守雄の樣にも帶里谷の樣にも思はれ難しとも判じ難し、殊に假面と云ひ口の戸など云へるは何故にや、口に戸ありて開閉する

如き假面の有る可しとも思はれねば是も亦疑惑の種なり楢尾は殆んど滿足の体にて「アヽ可哀相な者だ、此假面では一生涯自分で外すと云ふ事が出來ぬから、何うだ鎭臺長此工風には感心だらう　鱒ハイ實に最う貴方の智慧には恐れ入ました」捕囚は斯る鬼々しき言葉を聞き腹立しさに堪へざるや、夫とも傷所の痛みにや「ウーン」と一聲呻けども鼻より出る聲なれば其調子を聞分る事叶はず、妸陀は心の内にて「アヽ最う一度アノ樣な聲を出せば今度こそ聞分るに」と徒らに氣を揉むのみ「何だか守雄が怪我した頃の苦痛の聲にも似た樣に思はれるし、イヤ〳〵爾でも無いか知ん」取つ措つ思案の半ばに楢尾は又命を傳へ「ドレ假面の背後に在る螺番は何の樣な具合だ、此身躰を起して見ろ」鎭臺長は聲に應じ捕囚を釣臺の上に引起せり、今度こそは妸陀が目に捕囚の有樣歷々と寫り來る、妸陀は捕囚の胴より頭までを見るのみなれど餘の異樣なる其姿よ魂ひも身に添はぬまで驚き恐れ今まで

堪へ〳〵し心は思はずも口に發し「アレー」と一聲戸棚の中にて叫びたり楢尾は耳早く聞咎めて「オヤ何だか戸の外で聲がした樣だぞ聲はと云へど戸棚の内なり充分には洩れざりしが鎭臺長は打消して「ナニ其樣な事が有りますまい」と云ひながら立來りて廊下を一遍見廻せし末安心して又元の所へと退きたり抑も妙陀が斯まで驚きし據囚の有樣を如何にと云ふに兩手の堅く縛られしは扨置きて首より上は唯だ鐵の塊りかと思はるゝ如くにして假面と云はば假面なれど顏を蔽ふのみならで頭より頭の背後まで一面に行き渡りたる鐵の包みにて孰れよりするも其顏附の見え樣筈なし是を慘酷と云はずんば何をか云はん斯る無道の取扱ひを受くるもの我か所天の守雄ならで誰か有らんや帶里谷は寢武楢尾等の廻し者なり斯くも慘酷なる目に逢ふ筈なし所天の此有樣を目に見ながら如何ぞ知らぬ顏にて隱れしまゝ居らるべき我身も捕はるゝなら捕はれよ今は何をか厭ふ可き

妙陀は全く我を忘れ内より隱れ場の戸を蹴開かんとするよ怪しや此隱れ場所の内に妙陀の外に人ありて背後より確と妙陀を抱留めて動かさず妙陀が是はと驚く間もなく早や口鼻の嫌ひも無く手拭の如きものを推當て

其儘妙陀を蒸殺さんとす

第二十九回

我が身と同じ場所に隱れ居て堅く我身を捕へたるは抑も何人ぞ孰れより忍び入りて何が爲め茲に居たるや妙陀は唯だ口鼻を塞がれたる苦しさに左右の思案も浮び來らず振放さん一心にて手を張り足を蹈延しつゝ揉掻けるだけ身を揉掻くに彼の者は益々堅く引〆めつゝ妙陀の耳に口を寄せて「コレ妙陀樣幸助ですよ」と細聲き告ぐ扨は幸助我身と同じく生殘りて守雄の安否を伺ふ爲め此の所に忍び居たるかト妙陀は殆んど嬉しさに堪へず

忽ちに鎖りたれど、此時は既に遅し、今まで揉掻きたる物音は充分楢尾の耳に入りたり、彼れ荒々しく鎖臺長の肩を捕へ「ソレ何うだ、誰か戸棚の中に隠れ此有様を伺つて居る誰だ〳〵、國家の秘密を偷み視るとは容易ならぬ振舞ひだ、お前の仕置が弛いから兵士などが様々の所に隠れ此様な事をするのだ引摺出して充分に處分せねば」と云ふ、鎖臺長は且恐れ且怒り「定めし鼠が騒ぐのだらうと思ひますが念の爲です檢めて見ませう」と云ひ、直ちに階段の下に馳附け彼の戸棚を引明くるに、中は唯だ瓦落多の道具あるのみ、兵士も居ねば鼠も居ず、何の爲に音のしたるや殆んど合點の行かぬ程なれば、彼れ初めて安心し「御覽なさい此通りです、矢張り鼠がガタ〳〵云はせたのです」楢尾も茲に馳來り「ナニ其様な事は無い、少し前に人の聲がした、確に此戸棚の中で有た」とて鋭く眼を配るうち隅の湿暗き所に目を附け「ソレ何うだ、コレ〳〵此の通り床板を外して有るが」と云ふ、成る程鎖臺長の目にも疑

ふ所なし、三尺四方ほど床板を取脱しあり、今しも何者か茲より床の下へ逃込みしならんと思はるゝにぞ　鎖「是は實に驚きました、併し今の間に斯う取脱す事は出來ぬ筈です　楢「今の間に取脱さずとも先程から取脱して茲へ忍び入て居たので有らう　鎖「イヱ私しの兵士の中には決して其様な者は有りません　楢「兵士の中で無ければ必ず賊の一人だ、お前が死骸を檢めあんだ故、其中に誰か生殘り、床の下から忍び入たのだ　鎖「其様な筈は有ません賊は殺しにして仕舞ひました」とて少しでも已が手落を輕くせんと鎖臺長は切りに爭へども楢尾は爭な聞入れず「其様な事を云ふ内に逃られては大變だサア直に兵士を起し、鎖臺の周圍を取卷き、逃る事の出來ぬ様に仕て置て此床下を檢める、夫でも捕はらねば次第に依りて此鎖臺を燒拂ふ爾すれば曲者は床の下で燒死で仕舞ふだらう」と荒々しく差圖せられて猶鎖臺長も今は猶豫す可き時に非ず、咄嗟の間に彼の鐵假面の四人を孰れへか

運び去り號鈴を振鳴して非常を傳へ凡ろ廿分ばかりにして外側を圍ませ置き、更に屈强の兵士數名を撰びて之を彼の戸棚の中なる床板の外れより床下に潛り入らせ、最と嚴重に搜索を初めさせしに如何にせしか曲者らしき影だも無し、鎭臺長は稍や安心して「ですから矢張り鼠ですよ、床板は必ず久しい以前からアノ通り外れて居たのです、爾も無ければ曲者が床下で捕はる筈です、夫に又床下から忍び込だとしても第一外から床下へ忍び入る所が有ません」楢尾は此言葉に少しも滿足せざれど眞逆に初の決心通り此鎭臺を燒拂ふ程にも行かず、最と機嫌惡く自ら兵士數名を連れ鎭臺の外側を撿めしに床の風窓とも云ふ可き所に、一つ弛みたる石ありて此石を拔去れば床下へ出入すると左まで六しゝとも思はれず、殊に其石は誰か拔きて又元の通り嵌め込みたる者と思はるゝ所あるにぞ楢尾は心の中にて此所より誰か忍び入り下より床板を切拔て戸棚の中へ忍び居しに相違なしと

思ひ、早速其石を又取外す事の出來ぬ樣塗込めさせ、猶ほ總体の守を嚴重に堅めさせしが、其後にて再び鎭臺長を呼び「此樣子では鐵假面の四人を巴里へ送るにも途中で何の樣な變が有らうも知れぬ、何時茲を立つか分らぬ樣よし且つ見に隱れに數人の護衛を附けて行け」と命じたり

第三十回

妃陀は孰れに行きたるや、鎭臺の戸棚にて怪くも消失しまゝ更に跡も形も無し

是より幾日をか經たる頃、ベローム鎭臺の横手なる土堤の影に身を屈め堀の水に綸を垂れて餘念も無く魚を釣る一人の兵士あり、其服にて察すれば士官と迄には昇らぬも一通の雜兵には非ず先づ軍曹にもやあらん、此所へ通り掛る漁師風の色黑き男、暫し立留りて軍曹の魚釣る樣を見「アヘヽ幾等

兵士と威張ても釣に掛ては下手な者だ、殺生禁斷の場所だから已なぞに釣せれば引上る間も無い程に釣て見せるが」と嘲笑ひて過んとす、兵士は聞咎めて首を揚げ「何だ百姓、失禮な事を云ふと唯は置かぬぞ」漁師は猶ほ減らず口漁師と百姓を見違へる程では釣の下手なも無理は無いドレ旦那私しに釣せて御覽なさい」と云ひ遠慮もせずに軍曹の傍よ身を降しぬ、軍曹は暫し漁師の顏を眺めし末、全くの漁師なりと見て取りしか「ドレ其樣な廣言吐くなら釣て見せろ、若し釣なければ此濠へ叩き込むぞ　適濠が恐くて漁師が出來る者か、水の中と來れば魚の樣に游いで見せるワ」と云ひながら釣竿を受取りて先づ其餌を檢め「アヽ是じゃ釣ぬ筈だ最う水に洒けて香ひも何も無く成て居る」と云ひ已れの粗末なる衣囊の中より食殘しの乾酪を取出し之を小き團子に丸めて針の先に衝通す、其手業の早き事は餘程慣れたる者と見え殆ど目に見にぬばかりなり、斯て其針を堀の中に投入るゝに成る程

廣言空からず物の十分間と經ぬ中に早や五六尾も釣上て渡したれば軍曹殆ど感心し「何だ〳〵手前の附ける其餌は　漁「是を教へて堪る者か、素人に知られては漁師の飯は食揚げだ　軍「成る程聖は道に寄て賢しだ感心〳〵漁「爾ですとも魔が淵で賊を捕へるにはお前さんに叶はぬが同じ谷川で魚を取るには私しに叶ふ者は無い」異樣なる言葉に兵士は悸と驚きて、漁師の顏を鋭く睨むに彼れ少しも怯まず猶ほ平氣の調子にて「ですが旦那魔が淵の捕物は旨く遣りましたヲ、私しは少し下手の蘆の影で網を掛て居て悪皆見たが旦那の手際には驚たよ、腐を立ては叱られると思つたから、息を殺して潜んで居たが隨分恐しい思ひをしました」軍曹は益々驚き「何だ手前が見て居たのか　漁「見て居たにも毎夜アノ邊で網を卸すが私し共の商賣だ、上手を誰やら大勢で渡るから此個は魚が下手へ逃て來るなト早速網を張た所ろ罹ッたにも罹ッたにも網が破れる程罹ッた直に引上げて掛け直さう

と思ッて居ると、驚いたヲ、此方の土堤から一時に松明が現はれてパラ〳〵と鉄砲を射初た松明の光りで能く見えましたゼ、射れて河へ落る奴も有り倒れる奴も有りサ、だが旦那、アノ中に若しや女では有るまいがと思ふ樣な美しい小柄の若者も居ましたに可哀相にアノ若者まで川へ射込れて仕舞たが助けて遣度ッたよ、エ旦那アレの名は何と云ます」軍曹も浮々話に釣込れんとし「爾サ何でも男の服を着て居た美人も有たと云ふ事だが名は已達には分らぬよ　漁「じゃ全く女ですか、剛い者ですヲエ、女の癖にアノ通り軍人の中へ交て魔が淵を渡るなどは、ですが那の外に最一人女の樣な素敵な美男子が有ましたヲ、旦那より最と役目が上と見え士官の服を着けて居たがアレは旦那何うしました、彼奴の死る所ハッイ見損ッたが　軍「見損ふ筈サ彼奴は生捕られたものを　漁「エ、那の美男子がハヽア成る程、旦那がソレ飛掛ッて直に捕へたのがアノ美男子でしたか私しはアノ時の旦那の顔を

今でも覺えて居るが本統に勇しかッたよ、斯して魚を釣て居る所は餘り強く相にも見えぬけれど、エ旦那戰場へ出ると貴方の顔は引立ます、貴方でせうアレを捕へさのは軍曹は念々話に乘せられて「フム己だ、己一人と云ふ譯では無いが寄て集ッて繩を掛たのだ　漁「けれど何でも旦那が一番勇しかッた、貴方が一番先き飛附た樣で有た、チエ旦那　軍「爾よ、己が居無ければ捕押へる事が出來なかッたかも知ぬ　漁「爾すると旦那の手柄は剛い者だ今に士官に進められませう何だッて敵の大將を生捕たと云ふのだから、エ旦那アレが敵の大將でせう　軍「爾サ大將の一人サ　漁「ヤ大將が二人有たのですか　軍「爾だ二人有たが一人は死で仕舞た　漁「爾すると生取られた方が二人の内の珍しい方でせう　軍「隨分美しい男だッた、軍人には珍しい程の美男子だ　漁「其美男子は何しました、猶だ生て居るのですか　軍「生て居るにも近日巴里へ送つて國王か大宰相が直々に調べるのだ、アレが國家の

秘密を握つて居るから死しては大變だ　道「ヘエ國家の秘密、剛い者ですネエ、云はゝ猶だ美少年だがアレで國家の秘密を握るとは　耳「國家の秘密とは何の事だか手前に分るか　道「分りますと、も國の爲に大事の品物ですが耳「品物じゃ無い事柄だよ　道「アヽ事柄事柄、其大事の事柄を握た奴が巴里へ送られると云ふからは又旦那が附て行くのでせう　耳「ナニ己は附て行かぬ　道「成る程旦那の樣な勇士が此鎭臺を明けては留守が危いから、エ爾でせう貴方が留守番をするのでせう　耳「先ア〳〵　爾サ　道「爾すると何時送られます　耳「爾サ遲くも今から一週間だらう　道「ハア今日が四月の三日だから爾すると十日頃ですネ」と怪くも念を推れて軍曹の眼には忽ち疑ひの光りを浮め再び漁師の顏を睨むに漁師も今度こそは見破られしと思しか、一寸の猶豫も無く立上り樣、滿身の力を足に込め軍曹の背中を強く蹶るに何かは以て堪る可き、彼れ岸の外れに屈み居たる事とて「己れ」と叫ぶ眼

も無く眞逆樣に濠に落ち、水底の藻に搦まりしと見は、暫く待てども浮び上らず漁師は安心の樣子にて釣道具を濠に投込み「斯して置けば誰が見ても釣して居て、誤つて滑り落たとしか思はぬ」と云ひ窃かに當りを見廻したり此漁師抑も何者にや

第三十一回

此漁師抑も誰かるや、魔が淵に生殘りて妢陀を鎭臺の隱れ塲より救ひたる幸助なりとは讀者の既に察したる所なる可し

爾るにても幸助は如何にして生殘りしや、彼れも妢陀と同じく馬を射られて水中に轉落ちさる者にして幸ひ其身に怪我の無かりし爲め遂か下手より這上り何でも同勢中の幾人かは必ずペローヽの鎭臺に捕はれ居る者と思ひ直に鎭臺に馳附けて夜の猶ほ明ぬうち、風窓の石を外し其所より床下